

シラバス

シラバスの掲載ページは、P9～10の
開設科目一覧にある各授業科目の「シラ
バス頁」を参照してください。

(4) 人間学研究科子ども人間学専攻 開設科目一覧

科目区分	授業科目名	履修区分	配当学年	開講期	単位数	授業形態	備 考	シラバス頁		
基礎科目	人間学総論	必修	1 年	前期	2	講義		1		
基本科目	人間学概論Ⅰ（哲学と人間）	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	2		
	人間学概論Ⅱ（文学と人間）	選択	1・2 年	後期	2	講義	オムニバス（一部共同）	3		
	人間学概論Ⅲ（政治と人間）	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	4		
	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）	選択	1・2 年	後期	2	講義	オムニバス	5		
	人間学概論Ⅴ（自然と人間）	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	6		
	人間学研究法	必修	1 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	7		
専門科目	子ども人間学領域	学び学特論	選択	1・2 年	後期	2	講義		8	
		保育学特論	選択	1・2 年	前期	2	講義※	※演習も含む。	9	
		教育的ケアリング特論	選択	1・2 年	後期	2	講義		10	
		子ども思想史特論	選択	1・2 年	前期	2	講義		11	
		保育実践研究	選択	1・2 年	後期	2	演習		12	
		保育者特論	選択	1・2 年	前期	2	講義※	※演習も含む。	13	
		子ども・子育て支援実践研究	選択	1・2 年	後期	2	演習		14	
		児童家庭福祉特論	選択	1・2 年	前期	2	講義※	※演習も含む。	15	
		家族社会学特論	選択	1・2 年	後期	2	講義		16	
		子ども政策特論	選択	1・2 年	後期	2	講義		17	
		教育学特殊研究	選択	1・2 年	後期	2	講義		18	
		子どもとアート論	選択	1・2 年	前期	2	演習	オムニバス（一部共同）	19	
		子どもとことば論	選択	1・2 年	後期	2	講義※	※演習も含む。	20	
		子ども環境学特論	選択	1・2 年	前期	2	講義※	※演習も含む。	21	
		発達心理学特論	選択	1・2 年	前期	2	講義		22	
		保育・教育課程研究	選択	1・2 年	後期	2	講義※	※演習も含む。	23	
		関連領域	権利擁護特論	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同） 隔年開講（令和2年度開講）	24
			障害児・者福祉特論（インクルーシブ論を含む）	選択	1・2 年	前期	2	講義	隔年開講（令和3年度開講）	25
	地域福祉特論		選択	1・2 年	後期	2	講義※	※演習も含む。 隔年開講（令和2年度開講）	26	
	生活環境学特論		選択	1・2 年	前期	2	講義	隔年開講（令和2年度開講）	27	
	精神医学特論		選択	1・2 年	前期	2	講義	隔年開講（令和3年度開講）	28	
	臨床心理学特論		選択	1・2 年	後期	2	講義※	※演習も含む。 隔年開講（令和3年度開講）	29	
	研究指導	研究指導Ⅰ	必修	1 年	前期	2	演習		30～33	
研究指導Ⅱ		必修	1 年	後期	2	演習		34～37		
研究指導Ⅲ		必修	2 年	前期	2	演習		38～42		
研究指導Ⅳ		必修	2 年	後期	2	演習		43～47		

「オムニバース」：複数教員が授業を分担して担当

「共同」：複数教員が共同して授業を担当

人間学研究科心理学専攻 開設科目一覧

科目 区分	授業科目名	履修 区分	配当 学年	開講期	単位数	授業形態	備 考	シラバス 頁	
基礎科目	人間学総論	必修	1 年	前期	2	講義		1	
基本 科目	人間学概論Ⅰ（哲学と人間）	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	2	
	人間学概論Ⅱ（文学と人間）	選択	1・2 年	後期	2	講義	オムニバス（一部共同）	3	
	人間学概論Ⅲ（政治と人間）	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	4	
	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）	選択	1・2 年	後期	2	講義	オムニバス	5	
	人間学概論Ⅴ（自然と人間）	選択	1・2 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	6	
	人間学研究法	必修	1 年	前期	2	講義	オムニバス（一部共同）	7	
	専 門 科 目	基 幹 科 目	心理的アセスメントに関する理論と実践	必修	1 年	前期	2	講義・演習	48
心の健康教育に関する理論と実践			必修	1 年	前期	2	講義・演習	49	
心理支援に関する理論と実践			必修	1 年	後期	2	講義・演習	50	
家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践			必修	1 年	後期	2	講義・演習	51	
展 開 科 目		カウンセリング特論	選択	1・2 年	前期	2	講義	隔年開講(令和2年度開講)	52
		精神医学特論	選択	1・2 年	前期	2	講義	隔年開講(令和3年度開講)	53
		リハビリテーション心理学特論	選択	1・2 年	前期	2	講義	隔年開講(令和3年度開講)	54
		精神保健医療心理学特論	選択	1・2 年	後期	2	講義	隔年開講(令和2年度開講)	55
		コミュニティ臨床心理学特論	選択	1・2 年	後期	2	講義	隔年開講(令和3年度開講)	56
		認知行動療法特論	選択	1・2 年	後期	2	講義	隔年開講(令和2年度開講)	57
		臨床心理学特論	選択	1・2 年	後期	2	講義	隔年開講(令和3年度開講)	58
		心理支援技術演習	選択	1 年	前期	1	演習	共同	59
		公認心理師総合演習Ⅰ	選択	2 年	前期	1	演習	共同	60
		公認心理師総合演習Ⅱ	選択	2 年	後期	1	演習	共同	61
		保健医療分野に関する理論と支援の展開	必修	1 年	前期	2	講義		62
		教育分野に関する理論と支援の展開	必修	1 年	前期	2	講義		63
		福祉分野に関する理論と支援の展開	必修	1 年	後期	2	講義		64
		司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	必修	2 年	前期	2	講義		65
		産業・労働分野に関する理論と支援の展開	必修	1 年	後期	2	講義		66
実 践 実 習 科 目		心理実践実習指導Ⅰ	選択	1 年	後期	1	実験・実習 共同	67	
		心理実践実習Ⅰ	選択	1 年	後期	1	実験・実習 共同	68	
		心理実践実習指導Ⅱ	選択	2 年	前期	1	実験・実習 共同	69	
		心理実践実習Ⅱ	選択	2 年	前期	1	実験・実習 共同	70	
		心理実践実習指導Ⅲ	選択	2 年	後期	1	実験・実習 共同	71	
		心理実践実習Ⅲ	選択	2 年	後期	1	実験・実習 共同	72	
研究 指導	研究指導Ⅰ	必修	1 年	前期	2	演習		73～77	
	研究指導Ⅱ	必修	1 年	後期	2	演習		78～82	
	研究指導Ⅲ	必修	2 年	前期	2	演習		83～87	
	研究指導Ⅳ	必修	2 年	後期	2	演習		88～92	

「オムニバス」：複数教員が授業を分担して担当

「共同」：複数教員が共同して授業を担当

基礎科目
基本科目
(両専攻共通)

科目名	人間学総論		副題			
担当者	佐伯 胖					
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1年次	
授業の概要	本講義では、人類の進化をたどることから、なぜヒトは「ヒューマン」（人間の「人間らしさ」を備えた存在）になれたのかをたどり、そこから、人間の「社会性」、「言語」、「教育」の起源と展開を見てゆく。次に、人間の本性として備えた特性を、一貫性、効用性（最適性）、相互性（開放性）、審美性の4つの側面に焦点を当てる。そして教育において子どもを「人間としてみる」ということについて、①教育と「人間観」、②「教える」ことの恐ろしさを踏まえて、③倉橋惣三の「育ての心」を再考する。最後に、「人間」研究の在り方について、客観性神話からの脱皮、擬人的認識論、そして「二人称的アプローチ」について検討する。					
授業のねらい・到達目標	1. 「人間」とは何かを探究する。 2. 人間が「人間である」ということの特長を押さえ、「人間であること」の尊さを実感する。 3. 「人間学」を踏まえた教育の在り方、人間研究の在り方を探究する。					
授業の方法・授業計画						
1	人間の進化（1）―なぜヒトはヒューマンになれたか					
2	人間の進化（2）―「社会性」の起源					
3	人間の進化（3）―「言語」の発生と進化					
4	人間の進化（4）―「教育する」ということ（「アマラとカマラ」説再考）					
5	人間のモデル（1）―「一貫性」を求める					
6	人間のモデル（2）―「効用性」を求める					
7	人間のモデル（3）―「相互性」を求める					
8	人間のモデル（4）―「美しさ」を求める					
9	子どもを「人間としてみる」ということ（1）―教育と「人間観」					
10	子どもを「人間としてみる」ということ（2）―「教える」ことの恐ろしさ					
11	子どもを「人間としてみる」ということ（3）―倉橋の「育ての心」再考					
12	「人間」をどのように研究するか（1）―「客観性神話」からの脱皮					
13	「人間」をどのように研究するか（2）―「擬人的認識論」入門					
14	「人間」をどのように研究するか（3）―「二人称的アプローチ」入門					
15	まとめ―「人間学」とは何か					
期末						
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成、グループ・ディスカッションなどで積極的参加を求める。					
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回のレポート（60%）・発表等（40%）を基にして評価する。					
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後には授業内容の振り返りを十分にしておいて、次の授業の準備をすること。					
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。					
テキスト	佐伯胖 『認知科学の方法[新装版]』、東京大学出版会、2007年 佐伯他 『子どもを「人間としてみる」ということ』、ミネルヴァ書房、2013年 V. レディ著佐伯訳『驚くべき乳幼児の心の世界』、ミネルヴァ書房、2015年					
参考文献	NHKスペシャル取材班 『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』、角川書店、2012年 長谷川寿一・長谷川真理子 『進化と人間行動』、東京大学出版会、2000年 佐伯胖 『イメージ化による知識と学習』、東洋館、1978年 佐藤慎司・佐伯胖編著『かかわることば』、東京大学出版会、2017年					

科 目 名	人間学概論Ⅰ（哲学と人間）		副題		
担 当 者	尾崎博美				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	人間が本来もっている「ケア」性について、「哲学」及び「介護」の両領域において注目され、独自の観点から研究が進められている「ケアリング」論の理論および実践の二側面から考察する。 今年度は、広井良典著の『ケアを問い直す』を輪読し、「ケア」とはどのような意味をもつものなのか「教育」「介護」の場面に即して考察していく。 前半の講義では、人間が本来持っている「ケア」性について理解を深めるために「哲学」領域での「ケアリング」論の研究の経緯を辿ることから始める。 また、後半の講義では、「介護」領域での実践事例を通して介護現場における実践の基盤となる聴くこと、関わることに焦点をあてて考察していく。前半の講義で考察する「ケア（リング）」理論を交差させ、理論的及び実践的課題について検討する。 「哲学」と「介護」の其々の分野での理論および実践研究の成果を総合的に検討し、あらためて人間がもつ専門的な「技術」や「知識」を超えた、人間の「ケアリング」という営みの可能性について考察する。				
授業のねらい・到達目標	1. 人間が本来持っている「ケア」性について理解を深める。 2. 「哲学」の領域での「ケアリング」論を理解する。 3. 「介護」の領域での実践において「ケアリング」がどのような実践として捉えられているかを理解する。 4. 「子ども人間学」における「ケアリング」論の意義について理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー「人間」と「ケアリング」				
2	「哲学」領域での「ケアリング」論研究の経緯を辿る				
3	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』①				
4	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』②				
5	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』③				
6	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』④				
7	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢社会』⑤				
8	介護実践事例① あるがままに受け入れる				
9	介護実践事例② 生きてきた歴史				
10	介護実践事例③ 共生型ケア				
11	人間がもつ専門的な「技術」や「知識」を超えた、人間の「知」としての「ケアリング」				
12	「事例」研究①子ども 修士生の実践例の検討				
13	「事例」研究①子ども 修士生の実践例の検討				
14	「事例」研究①子ども 修士生の実践例の検討				
15	総括：人間がもつ、本性としての「ケアリング」				
期末	試験なし				
授業に関する連絡	本授業では前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。				
評価方法及び評価基準	最終レポート(40%)、授業内で提出する小レポート(30%)、発表(30%)に基づいて評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業後は授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	広井良典『ケアを問い直すー〈深層の時間〉と高齢化社会』ちくま書房 2003年 （尚、初回に授業で使用する箇所をコピーしたものを配布する。）				
参考文献	佐伯胖 『共感ー育ち合う保育のなかで』、ミネルヴァ書房、2007年 藤川信夫 『教育/福祉という舞台 動的ドラマトゥルギーの試み』、大阪大学出版会、2014年 佐伯胖『子どもがケアする世界をケアする』、ミネルヴァ書房、 広井良典『ケア学』、医学書院、2000年 M. メイヤロフ著、田村ほか訳『ケアの本質ー生きることの意味』、ゆみる出版、1987年 露木悦子『介護の心・看護の心 心に響く共感のアプローチー介護の心を「聴くこと」に求めてー』、医学書院、2002年				

科 目 名	人間学概論Ⅱ（文学と人間）		副題		
担 当 者	印藤 京子・染谷 裕子（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	文学は、それを生み育んだ時代の精神やその時代に生きる人間の内面を表現する芸術である。そして文学に登場する人間は、その時代を投影する存在であると同時に、その前の時代を反映しかつ次の時代を担う存在である。本講座では、家族ならびに社会的弱者の2つに焦点を絞って登場人物を掘り下げ、人間に対する洞察力を深める。（共同1回、オムニバス14回） 印藤担当（第2回～第8回）では、シェイクスピアの <i>The Merchant of Venice</i> を題材にして、そこに描かれたさまざまな人物を、歴史・社会・文化の側面から考察する。 染谷担当（第9回～第15回）では、室町時代を中心に成立した短編物語群「お伽草子」の中で多くの人に親しまれたと思われる「文正草子」を取り上げる。長年仕えた主人に勘当された男が塩売りで大成功をおさめ立身出世する物語である。言葉と表現を切り口として、その時代の人々の物の見方を探っていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 所定のテーマに関する文献および資料を理解し他者に説明できる。 2. 所定のテーマに関する考察を口頭ならびに書面にてわかり易く発表できる。 3. 所定のテーマに関する他者の発表に対して的確な指摘ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	講座案内、課題図書、資料検索方法等（印藤・染谷）				
2	〈講義〉エリザベス朝の演劇（印藤）				
3	〈発表・討議〉基本事項：時代背景・生涯・作品・ユダヤ人（印藤）				
4	〈発表・討議〉作品考察：第1幕（印藤）				
5	〈発表・討議〉作品考察：第2幕（印藤）				
6	〈発表・討議〉作品考察：第3幕（印藤）				
7	〈発表・討議〉作品考察：第4幕（印藤）				
8	〈発表・討議〉作品考察：第5幕（印藤）				
9	〈講義〉「お伽草子」とは何か（染谷）				
10	〈講義〉作品「文正草子」について 絵巻絵本と異本群（染谷）				
11	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 勘当され塩売りとなる（染谷）				
12	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 長者となった文正（染谷）				
13	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 美しい二人の娘（染谷）				
14	〈発表・討議〉「文正草子」を読む 中將と姉娘の恋（染谷）				
15	〈講義〉「文正草子」の周辺（染谷）				
期末					
授業に関する連絡	1・2・3・9・10・15は主に教員が講義するが、その他は受講生による発表および討議が中心となる。				
評価方法及び評価基準	口頭発表（30％）、討議（20％）、考察報告（50％）により評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習：口頭発表に向けて入念な準備 事後学習：討議を踏まえて口頭発表に手を加え、考察報告を作成				
履修上の注意	文献理解に取り組む真摯な姿勢が求められる。シェイクスピア作品の考察に際しては、対訳本もしくは原書を参照すること。				
テキスト	初回授業時に指示する。				
参考文献	永野藤夫『世界の演劇文化史―人類史の生のリズムを移す世界劇場』 原書房 2001 坂本和男、来住正三編『イギリス・アメリカ演劇事典』 親水社 1999 大島建彦ほか編『室町物語草子集』 新編日本古典文学全集63 小学館 2002 徳田和夫編『お伽草子事典』 東京堂出版 2002				

科目名	人間学概論Ⅲ（政治と人間）	副題	
担当者	藤森 智子・國見 真理子（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	社会は個々の人間から形成され、社会科学の一つである政治学は広く人間の営みを扱うといえよう。本来、政治とは利害の調整の過程であるといわれる。本講座は、国家や社会の統治や政策が人間形成に与える影響の検討を主な目的とする。 初回講義は、藤森と國見が共同で、政治の観点を中心に、国家と人間に関わる関係を概観する。藤森担当の講義では、マクロな視点では国家の統治・政策を取り上げ検討する。ミクロな視点では個々の政策と人間形成を取り上げ、ケース・スタディを行う。國見担当の講義では、国家と人間との関わりを経済、法律面から取り上げ、ケース・スタディを行う。		
授業のねらい・到達目標	1. 国家に関わる社会科学的アプローチを理解する。 2. 国家と人間形成の諸相を明らかにする。 3. 国家に関わる多様な問題分析の方法を確立する。		
1	ガイダンス/研究課題の設定(藤森・國見)		
2	近代社会と人間(藤森)		
3	国家権力と人間(藤森)		
4	民主主義と人間(藤森)		
5	国家とナショナリズム(藤森)		
6	言語政策と人間①：近代日本を例に(藤森)		
7	言語政策と人間②：日本の植民地を例に(藤森)		
8	受講生の発表と討論(藤森)		
9	統治と人間（國見）		
10	国家権力を巡る諸問題①：行政国家現象（國見）		
11	国家権力を巡る諸問題②：財政問題を例に（國見）		
12	国家権力を巡る諸問題③：裁判員制度を例に（國見）		
13	事例検討①：統治を巡る判例検討（國見）		
14	事例検討②：人間を巡る判例検討（國見）		
15	総括（國見）		
期末			
授業に関する連絡	「でんでんばん」を通じて履修者に適宜連絡する。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表・討論(50%)及び期末課題(50%)で評価する。		
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してほしい。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてほしい。		
履修上の注意	特になし。		
テキスト	特になし。		
参考文献	佐藤幸治「日本国憲法論」（成文堂） 別冊ジュリスト『憲法判例百選Ⅰ・Ⅱ』（有斐閣）		

科 目 名	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）	副題	
担 当 者	安村 清美・三政 洋一（オムニバス）		
開 講 期	後期	単位数	2 単位
		配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	本講義は、人間の芸術活動がいかに「人間」を人間たらしめてきたか（いるか）について、歴史的、実践的な観点から探究することを目的とする。特に、人間存在そのものである身体を対象とする舞踊学、美術解剖学領域の研究を通して、時空間における芸術の表現と伝達の関係性を考察し「人間の芸術性」及び「芸術の人間性」について検討していく。 安村担当の講義では、「人はなぜ踊るのか、舞踊はなぜ人間社会に存在し続けているのか」という問いについて、歴史と地域の中で生成され創造・伝承されてきた舞踊を概観し、さらに、舞踊各ジャンル固有の芸術領域としての特殊性とその存在の意味について、芸術の表現と伝達の関係性から探究する。 また三政担当の講義では、人を主題とする様々な美術作品について、人体解剖学を基にその表現の特徴について考察していく。人間は太古から現在に至るまで人の姿・形を平面や立体にして表してきたが、殊に彫刻の分野においては歴史上、人の形を基に表した作品が主流である。人体の構造を概観しながら古今東西の美術作品、特に彫刻作品を中心にみつめて人間の芸術表現について探求していく。		
授業のねらい・到達目標	人間の芸術活動について舞踊、美術解剖学を中心に理解を深めていくことがねらいであり、次の到達目標を設定する。 1. 舞踊について ①伝承文化及び比較文化の観点から海外、日本の舞踊について理解する。 ②演じられた人間像としての芸術舞踊であるバレエについて理解する。 ③舞踊芸術の表現と伝達性との関係性について、バレエ以降の人間と舞踊について考察を深める。 2. 美術解剖学について ①人体の基本的な構造について理解する。 ②ギリシア時代の彫刻からミケランジェロ、ロダンなど西洋における彫刻家の作品を見つめ、その思想、造形上の特徴について理解する。 ③近・現代における様々な美術作品を観ていくこと人間の為す形について考えを深める。		
授業の方法・授業計画			
1	舞踊文化の概観―歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊①海外（安村）		
2	舞踊文化の概観―歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊②日本（安村）		
3	伝承文化としての舞踊の比較検討（安村）		
4	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像①バレエ（安村）		
5	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像②バレエ以降（安村）		
6	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像③現代（安村）		
7	舞踊芸術の表現と伝達との関係性―身体と舞踊の今日的課題（安村）		
8	「人はなぜ踊るのか」という問いについての再考（安村）		
9	美術解剖学概観―人間による人体の追求について考える（三政）		
10	造形芸術に見る人体の法則―プロポーション、バランス、リズム（三政）		
11	頭部の構造①（三政）		
12	胴体の構造②―胸部・腹部・腰部（三政）		
13	上肢の構造③―前腕・上腕・手（三政）		
14	下肢の構造④―大腿・下腿・足（三政）		
15	造形芸術における人間像（三政）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。演習では、履修生に課題を課することがある。		
評価方法及び評価基準	レポート（50%）、および発表（50%）に基づいて総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習：シラバスを確認し、授業に関わる内容について予習すること。事後学習：学習した内容について各種文献等を用いて検討し、理解を深めること。		
履修上の注意	芸術に関心を持ち、意欲的に授業に臨むこと。		
テキスト	「ダンス・バイブル―コンテンポラリー・ダンス誕生の秘密を探る」乗越たかお、2010、河出書房新社 その他授業時にプリントを配布する。		
参考文献	「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版 「アーティストのための美術解剖学」ヴァレリー・L・ウインスロウ、2013、マール社		

科目名	人間学概論Ⅴ（自然と人間）	副題	
担当者	石橋 哲成・外川 重信（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	本講義では、「自然」と「人間」の両者に関連させながら、「自然と人間形成」及び「自然体験」をテーマにして、理論と実践の両側面から考察する。 石橋担当の講義では、ヨーロッパの近世におけるルソーやフレーベルの自然主義的教育論、さらにはヨーロッパと日本の近代において展開した新教育運動、とりわけ田園教育塾運動を考察することによって、自然と人間形成がどのように深く関わりあっているのかを探っていく。 外川担当の講義では、4回の講義においては、自然体験の理論と方法について考察する。特に登山・冒険教育・キャンプなどの野外運動の実際とその課題について考察する。3回分に相当する学外授業においては、バリエーションルートを使った登山を通して、自然の中で仲間と共同生活を体験し、自然と里山、自然と登山、「自然」と人間との関係について考察する。 最終回の石橋と外川の共同授業では、それまでの14回の授業をふり返り、総まとめをおこなったうえで、将来の「自然」と「人間」との課題をともに考えてみたい。		
授業のねらい・到達目標	1. 自然と人間の深い関わりについて理解する。 2. 自然が人間形成に与える影響について理解する。 3. 学外授業を通して、「自然」と「人間」との関係を過去と現在までを鳥瞰し、今後の関係を理解する。		
1	「自然」と「人間形成」の関わりについて考える（石橋）		
2	ルソーにおける自然と人間形成（石橋）		
3	フレーベルにおける自然と人間形成（石橋）		
4	イギリスの新教育運動と自然（石橋）		
5	ドイツの新教育運動と自然（石橋）		
6	日本における新教育運動と自然（石橋）		
7	全人教育の場としての自然（石橋）		
8	自然体験の方法（外川）		
9	冒険教育の理論と課題（外川）		
10	野外運動（キャンプ）の理論と課題（外川）		
11	登山の理論と実際の方法と準備（外川）		
12	高尾山登山における日本文化と自然の融合（外川）*休日に振り替え授業をする。		
13	高尾山登山におけるバリエーションルートの歩行体験（外川）*休日に振り替え授業をする。		
14	高尾山登山における登山の技術（外川）*休日に振り替え授業をする。		
15	総まとめ、ならびに今後の自然と人間の課題を考える（石橋・外川）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、さらには学外授業を取り入れて行う。演習・学外授業では、レポート・レジュメ作成を課する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（30%）・発表等（40%）・最終レポート（30%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後に反復学習をすること。安全な学外学習を行うための準備をすること。		
履修上の注意	自然と人間形成の関係、自然保護に問題意識をもって、本授業に臨み、主体的・積極的に議論に参加すること。学外授業の登山では、事前から健康に留意し、体力をつけておくこと。		
テキスト	石橋哲成「教育の場としての自然をどのように捉えるか」（『全人教育通論』玉川大学、1999）		
参考文献	星野敏男、金子和正、『野外教育の理論と実践』杏林書院、2011 ディックプラウティ等、『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』みくに出版、1997		

科 目 名	人間学研究法		副題		
担 当 者	犬塚 典子・渡邊 由己（オムニバス）				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	人間学の研究法は研究のデザインをはじめ、データ収集の技法や各種の方法論的アプローチ、さらには修士論文作成の手法について理解を深める。 犬塚担当（8回）は、質的研究を行うための知識と技法を学ぶ。関連領域の基礎的な論文を読み、先行研究の検討、文献リストの作成、概念・言葉の定義、論点・議論の整理法などを身につける。まとめとして、K J 法、セブン・クロス・ワークショップを行い、論文執筆のためのアウトライン作成を試みる。 渡邊担当（7回）は、実証的研究（量的研究）の理論と実際を学ぶ。また、なぜ方法論的に対立する量的、質的研究者がともに人間学研究を発展させて来たのかについて、存在論、認識論のリフレクションから考察する。				
授業のねらい・到達目標	1. 量的研究方法および質的研究方法について基本的な理解を深める。 2. 各自の研究テーマにおけるリサーチクエスションと合致した研究方法を見出す。				
授業の方法・授業計画					
1	人間学研究法Ⅰ：存在論的、認識論的、方法論的リフレクション（渡邊）				
2	研究法のための存在論、認識論（渡邊）				
3	研究法のための方法論（渡邊）				
4	実証的研究①実験法（渡邊）				
5	実証的研究②横断的研究（渡邊）				
6	実証的研究③縦断的研究（渡邊）				
7	実証的研究④調査票調査（渡邊）				
8	人間学研究法Ⅱ：ライフコース研究を手がかりに（犬塚）				
9	質的研究①先行研究の検討、文献リストの作成（犬塚）				
10	質的研究②概念、言葉の定義（犬塚）				
11	質的研究③歴史的調査（犬塚）				
12	質的研究④ケース・スタディ（犬塚）				
13	質的研究⑤論点、議論の整理（犬塚）				
14	情報整理について（K J 法とセブン・クロス・ワークショップ）（犬塚）				
15	修士論文のアウトラインを考える（犬塚）				
期末					
授業に関する連絡	ポータルサイトででんでんばんで掲示する				
評価方法及び評価基準	各回に与える課題・レポート（50%）、及び発表（50%）を中心に評価する。				
事前・事後学習の内容	質的研究に関しては資料の読み込み、データの収集および分析が事前・事後共に課せられるので十分な準備の上、出席すること				
履修上の注意	リーディングアサイメントは授業初日に提示する。				
テキスト	野村康 2017 「社会科学の考え方」 名古屋大学出版会 9784815808761				
参考文献	「創造の方法学」高根正昭 講談社 2014 「動きながら識る、関わりながら考える」伊藤哲司・能智正博・田中智子著 ナカニシヤ出版				

専門科目

(子ども人間学専攻)

科 目 名	学び学特論		副題		
担 当 者	佐伯 胖				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	いわゆる「学習」（動物を含めた生物の行動形成）についての心理学、すなわち学習心理学は、20世紀後半から数度にわたって大きな変革を経てきた。とくに、人間の学習は、過去の学習心理学と決別し、人間学の一領域として新しく生まれ変わり、発展してきている。そのきっかけを作った理論は、「正統的周辺参加論」とよばれている。講義では、この理論をさらに人間学的観点から発展させた「学び学」を提唱する。				
授業のねらい・到達目標	「学習」についての科学研究は、長い間、行動主義心理学の考え方に支配されていたが、それへの根源的批判から、認知心理学、状況論を経て正統的周辺参加論に至っている。講義では、それらの経緯をたどり、人間学的観点からの「学び学」の考え方を習得することを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	「勉強」と「学び」				
2	メタ理論—理論のタテ糸・ヨコ糸・ナナメ糸				
3	行動主義とは何か				
4	認知革命とは何か				
5	人工知能と学習科学				
6	認知的徒弟制論				
7	「ダイエット算数」とは何か				
8	状況論革命				
9	正統的周辺参加論				
10	「学校化」のおそろしさ				
11	「学ぶ」ということの意味				
12	考えることの教育				
13	「わかる」ということの意味				
14	「わかり方」の探求（1）				
15	「わかり方」の探求（2）				
期末					
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。11～15回は当該書籍の1章を読んで、感想を出し合い討議する。				
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50%）。それらを基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。				
履修上の注意	全講義に出席のこと				
テキスト	J. レイヴ&E. ウェンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年				
参考文献	佐伯 胖著『「学び」の構造』東洋館、1975年 佐伯 胖著『イメージ化による知識と学習』東洋館、1978年 佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年				

科 目 名	保育学特論		副題		
担 当 者	内藤 知美				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。 2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。				
授業の方法・授業計画					
1	保育のまなざし—教える、教えられる—				
2	子どもか子どもたちかという「問い」				
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち				
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ				
5	保育フィールドの構造と理解				
6	遊びを通した保育（1）事例検討：身体的であること				
7	遊びを通した保育（2）事例検討：共同的、協働的であること				
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか				
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築				
10	保育における対話と同僚性				
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理				
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価				
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい				
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環				
15	まとめ：保育の課題と展望				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメを担当者は作成すること。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	鯨岡峻『保育主体として育てる営み』ミネルヴァ書房, 2010年 佐伯胖編『共感—育ち合う保育のなかで—』ミネルヴァ書房, 2007年				
参考文献	J.レイヴン&E.ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書, 1993年 日本保育学会編『保育学講座Ⅰ保育学とは—問いと成り立ち—』東京大学出版会, 2016年				

科 目 名	教育的ケアリング特論		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	本講義では、教育の文脈における「ケアリング」の概念を議論することの意義を考察し、それが「人間の学びとは何か」「人間の教えるとは何か」という問題に新たな視点を提供することについて考える。 上記の目的のために、学校における「ケアリング」の重要性について論じているジェーン・ローランド・マーチン著『スクールホーム―ケア>する学校』、またネル・ノディングズの『ケアリング』を輪読する。				
授業のねらい・到達目標	1. 教育における「ケアリング」概念を理解する。 2. 学校教育における具体的な「ケアリング」の実践例を分析する。 3. 教育における「ケアリング」の意義を理解した上で、新たな教育像および教員像を構築する。				
授業の方法・授業計画					
1	教育における「ケアリング」とは何か				
2	学校教育における「ケアリング」の実践事例を考える				
3	『スクールホーム』の輪読(1)家庭と学校				
4	『スクールホーム』の輪読(2)文化とカリキュラム				
5	『スクールホーム』の輪読(3)生きることへの学び				
6	『スクールホーム』の輪読(4)抑圧された家庭生活				
7	『スクールホーム』の輪読(5)家庭と世界				
8	『スクールホーム』の総括				
9	『ケアリング』の輪読(1)なぜケアリングにかかわるのか				
10	『ケアリング』の輪読(2)ケアするひと				
11	『ケアリング』の輪読(3)ケアされるひと				
12	『ケアリング』の輪読(4)ケアリングの倫理				
13	『ケアリング』の総括				
14	「ケアリング」論から考える教育像・教員像				
15	まとめ				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	本授業では、学術書を履修生全員で読み込み、各回担当の履修生がレジュメ作成を担当し、発表することを課する。その際、概念、理論などを理解した上で、レジュメ作成および発表をすること。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（25%）・発表等（25%）・最終レポート（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予定されている内容に該当する教科書の章を事前に読んでおくこと。 授業の内容を必ず復習すること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	J. R. マーティン 生田久美子監訳『スクールホーム―ケア>する学校』、東京大学出版会、2007年 N. ノディングス 立山善康他訳『ケアリング 倫理と道徳の教育―女性の観点から』、晃洋書房、1997年				
参考文献	N. ノディングス 山崎洋子・菱刈晃夫訳『幸せのための教育』、知泉書館、2008年 N. ノディングス 佐藤学訳『学校におけるケアの挑戦―もう一つの教育を求めて』、ゆみる出版、2007年 佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアする:保育における「二人称的アプローチ」入門』、ミネルヴァ書房、2017年				

科 目 名	子ども思想史特論		副題		
担 当 者	石橋 哲成				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのでしょうか。本講では、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく。今日の子どもの観の先駆けとなったのは、ルソーであった。ルソーが「子どもの発見者」と言われる所以である。その後ルソーの影響を強く受けた、ペスタロッチー、さらに「幼稚園」の創立者となったフレーベルや「子どもの家」を創立したモンテッソーリが現れた。それぞれがどのような境遇の中で、どのような子ども観を獲得していったのかを考察する。				
授業のねらい・到達目標	1. ヨーロッパ中世の子ども観はどのようなものであり、それに対して、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、モンテッソーリは、どのような子ども観を獲得していったのかを理解する。 2. その理解の上に立って、受講者各自も自らの子ども観を確固たるものにしていくこと。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション ― 子ども思想史を学ぶ意味				
2	ヨーロッパ中世における人間観・子ども観				
3	ルネッサンス期における人間観・子ども観				
4	近世における子ども観の概観				
5	ルソーにおける子ども観の成立過程				
6	ルソーにおける子ども観と教育観				
7	ペスタロッチーにおける子ども観の成立過程				
8	ペスタロッチーにおける子ども観と教育観				
9	フレーベルにおける子ども観の成立過程				
10	フレーベルにおける子ども観と教育観				
11	モンテッソーリにおける子ども観と教育観				
12	西洋の新教育運動における子ども観と教育観				
13	シュタイナーにおける子ども観と教育観				
14	ランゲフェルトにおける「子ども人間学」				
15	受講生による研究発表：子ども思想史と幼児教育				
期末					
授業に関する連絡	授業は原則として講義形式で行うが、途中で演習形式でも行う。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。				
テキスト	事前に授業資料を配布する。				
参考文献	ルソー著/今野一雄訳『エミール（上）』/岩波書店/2012（第80刷） ペスタロッチー著/前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』/玉川大学出版部 フレーベル著/小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集第2巻』）/玉川大学出版部				

科目名	保育実践研究		副題		
担当者	高嶋 景子				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。				
授業のねらい・到達目標	保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在り方について探究していくことを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～				
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～				
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～				
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～				
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～				
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～				
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～				
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～				
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～				
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～				
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～				
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～				
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行っておくこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。				
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。				
テキスト	岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房, 2013年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社, 2006年				
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 鯨岡峻・鯨岡和子著『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 河邊貴子著『保育記録の機能と役割—保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言—』聖公会出版, 2013年				

科目名	保育者特論		副題		
担当者	高嶋 景子				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生起し、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D.ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的实践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 2. 保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	保育者の専門性に関する研究の動向（1）～歴史の変遷を辿る～				
3	保育者の専門性に関する研究の動向（2）～OECD報告等における研究動向～				
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（1）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～				
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（2）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～				
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（3）～正統的周辺参加論とは～				
7	「保育者になるということ」（1）～「子どもの声を聴く」とは～				
8	「保育者になるということ」（2）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～				
9	「保育者になるということ」（3）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～				
10	「保育者になるということ」（4）～子どもと保育者の相互主体性～				
	保育者の学びを支える多様な対話（1）～省察的实践家としての保育者の専門性～				
12	保育者の学びを支える多様な対話（2）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～				
13	保育者の学びを支える多様な対話（3）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～				
14	保育者の学びを支える多様な対話（4）～対話のもつ「多声性」への着目～				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジュメの作成を担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。				
テキスト	佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房, 2017				
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館, 1998				

科 目 名	子ども・子育て支援実践研究		副題		
担 当 者	犬塚 典子				
開 講 期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について、前半は、OECD諸国の動向について把握し、カナダの事例を分析する。後半は、日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し、子育て支援実践のための理論、政策、財政のありかたについて検討する。				
授業のねらい・到達目標	1. 日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 海外における施策や実践との比較から、日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 3. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション（ガイダンスおよび課題研究について）				
2	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（1）				
3	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（2）				
4	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（3）				
5	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（1）全日制幼稚園				
6	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（2）学童保育				
7	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（3）父親休業				
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状				
9	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（1）幼稚園・保育所				
10	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（2）認定こども園				
11	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（3）事業所内保育施設				
12	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（4）病児・病後児保育				
13	日本の政策事例に対する討議（1）				
14	日本の政策事例に対する討議（2）				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	でんでんぱんを通して連絡する。				
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。				
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。				
テキスト	配布資料を中心に進める。				
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店、2011年。				

科 目 名	児童家庭福祉特論		副題		
担 当 者	高柳 瑞穂				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	当授業では、児童福祉に関する歴史的及び現代的な問題を多角的に扱う。「家庭での養育力を高めるための支援とは」「児童福祉の質を高めるために必要なこととは（専門職養成のあり方なども含めて）」といったテーマについて、多様な先行研究を分析し、考察していく。 上記の、特に後者のテーマを考察するうえではジェンダー視点が不可欠である。ジェンダー史上、長らく論争的となってきた「福祉職（とりわけソーシャルワーカー）の創出は母性の職業化であったのか」という問いを、先行研究並びにアクチュアルな素材を用いて検討していく。このことは、性別役割分業から派生するさまざまな重責を担わされつつ、職場では男性と同等（ときに同等以上）の働きを期待される現代の日本の保育・福祉現場の女性専門職の状況にも通底する。 以上を総合して、現代の日本の児童福祉行政や現場の抱える矛盾や困難を浮き彫りにし、考察を深めることを目的とする。				
授業のねらい・到達目標	1. 「家族」「子ども」「児童」等、児童家庭福祉に関する基本的な概念を、社会福祉思想史・制度史の中に位置付けて理解する。 2. 「母性の職業化としてのソーシャルワーク」について歴史的・現代的な視点から考察する。 3. 児童家庭福祉に関する多様な先行研究を読み解き、批判的に考察するとともに、現代的な問題や自身の修論テーマに結びつけて分析・考察する力を養う。 4. 以上の1.～3.を通じて、現代の日本の児童福祉行政や現場の抱える矛盾や困難を浮き彫りにし、考察を深める。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス、授業の進め方				
2	A. ザロモンについて：ヨーロッパのリッチモンドと呼ばれて一母性の職業化としてのソーシャルワーク				
3	児童福祉とジェンダー				
4	専門職の誕生：専門職から国家資格への移行とそれに伴う養成課程の整備				
5	先行研究の分析方法				
6	児童移民問題 1：映画『オレンジと太陽』前編				
7	児童移民問題 2：映画『オレンジと太陽』後編				
8	先行研究紹介、発表の分担決め				
9	発表 1				
10	発表 2				
11	発表 3				
12	各自の修論テーマの振り返り、発表（当授業で学んだ視点から振り返ってみるとどうなるか） 1				
13	各自の修論テーマの振り返り、発表（当授業で学んだ視点から振り返ってみるとどうなるか） 2				
14	各自の修論テーマの振り返り、発表（当授業で学んだ視点から振り返ってみるとどうなるか） 3				
15	まとめ				
期末	なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	講義と演習を適宜、組み合わせて行う。諸連絡は授業内ならびにでんでんばんを通じて行う。				
評価方法及び評価基準	授業内のディスカッションへの貢献度（50％）、自身の担当する発表（50％）				
事前・事後学習の内容	すべての研究は先行研究の分析から出発する。当科目ならびに自身の修論テーマに関する研究動向に常にアンテナを張り、普段から学術文献（英語文献含む）に触れる習慣を身に付けてほしい。そのために毎授業、事前に2時間程度、事後に2時間程度、読書時間を確保すること。				
履修上の注意	内容や受講者の興味・関心に合わせて進行を変更する可能性がある。調査や文献収集・分析等、授業時間外での研究作業を必要とする。				
テキスト	授業内容や受講者の興味・関心に即してその都度、指定する。				
参考文献	吉田久一、岡田英己子（2000）『社会福祉思想史入門』（勁草書房）ほか				

科 目 名	家族社会学特論		副題		
担 当 者	小玉 亮子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	アリエスの研究を嚆矢として家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみなす、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、家族の問題について社会学的に分析する。				
授業のねらい・到達目標	社会的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション ― 家族社会学のパラダイム転換を受けて				
2	近代家族とは何か				
3	家族の危機と年齢段階				
4	家族と学校・地域との関係				
5	連携とパートナーシップ				
6	社会変動と教育改革				
7	新らしい能力観と子育て				
8	家族の課題を考える				
9	家族の不安				
10	家族の期待				
11	家族と参加				
12	教師からみた家族（1）				
13	教師からみた家族（2）				
14	ジェンダーと家族				
15	これからの家族の課題を考える				
期末					
授業に関する連絡	社会における家族イメージを知るために、メディアによる家族に関する報道などに注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。				
評価方法及び評価基準	授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。				
テキスト	小玉亮子編『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社				
参考文献	藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 アリエス（1980）『子どもの誕生』みすず書房				

科 目 名	子ども政策特論		副題		
担 当 者	渡邊 英則				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	平成 2 7 年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成 3 0 年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。少子化対策や待機児童対策、地方分権、子育て支援の充実など、教育・保育施策全体を、国や地方が地域の実態に合わせたものにしていこうとする動きも活発である。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、ではどのように園やクラスを経営し、どのように教育や保育を行っていけばいいかを探求していくことにする。				
授業のねらい・到達目標	1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。新たにできる制度は子どもを本当に大事にする社会を実現しようとする制度となっているのか、園や保育者はどんな子どもを育てようとしていて、その営みを支える制度となっているのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	O E C D の調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～				
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～				
4	学習指導要領の改訂について				
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題				
6	保育園制度の基本的な考え方と課題				
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～				
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～				
9	認定こども園制度について（3）～認定こども園保育要領を読み解く～				
10	子育て支援について				
11	幼保小連携について				
12	特別支援教育について				
13	海外の保育制度について				
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。				
テキスト	『保育白書2015』ひとなる書房、全国保育団体連絡会・保育研究所編（※その年度の最新のものを使用する） OECD保育白書―人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較 明石書店 2011年				
参考文献	佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2 0 1 3 年 マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房、2 0 1 3 年				

科目名	教育学特殊研究	副題	
担当者	石橋 哲成・吉國 陽一 (オムニバス)		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	本年度の「教育学特殊研究」においては、ドイツとロシアの2つの国の教育学・心理学の文献を読むことによって、教育学的視野を広げることを目指したい。授業の前半においては、ドイツの教育学者、ボルノーの『教育を支えるもの―教育関係の人間学的考察―』（原題は"Die paedagogische Atmosphaere"）を読み進める。教育がうまくいくかどうかの鍵は、子どもと教育者の間の教育的関係がうまくいくかにかかっていると言っても過言ではない。教育的関係をボルノーに従って、子どもと教育者の両方から考察していく。 授業後半においては革命期におけるロシアの心理学者、レフ・ヴィゴツキーの心理学を文献購読を通じて学ぶ。ヴィゴツキーの心理学においては子どもの学習と発達を社会的関係を通して獲得される文化を中心軸として理解する。また、事物を運動の過程において理解する弁証法的な視点から、子どもは他者と文化との接点において常に「発達しつつある存在」として理解される。ヴィゴツキーの心理学を学ぶことを通して、子どもを理解する新たな視座を獲得することを目指す。		
授業のねらい・到達目標	1. ボルノーは「子どもの被包感」についてどのように捉えているのかを理解する。 2. 教育的関係を良好なものにするために、教育者に必要なものは何かを吟味する。 3. ヴィゴツキーの心理学に触れることを通して、他者と文化との接点において常に「発達しつつある存在」として子どもを理解する視点を手に入れる。 4. ヴィゴツキーの心理学の観点から教授-学習や子どもの遊びといった事象を理解する。		
1	ボルノーの教育的思索の概要		
2	子どもの被包感の大切さ		
3	子どもの気持ち（快活・朝のよう感情・期待の喜ばしさ）		
4	子どもの徳性（感謝・従順・愛・尊敬）		
5	教育者の子どもへの信頼		
6	教育者の徳性（教育愛・期待・忍耐・希望）		
7	円熟した教育者の基本的態度（清明・ユーモア・善意）		
8	ヴィゴツキー心理学の概要		
9	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学①-人間を人間たらしめるもの-		
10	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学②-ヴィゴツキーの研究手法-		
11	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学③-高次精神機能とその社会的起源-		
12	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学④-高次精神機能の発達の観点から見た書き言葉の前史-		
13	ヴィゴツキーの障害児教育論		
14	ヴィゴツキーの遊び論		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は演習形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分に次回授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	ボルノウ著、森・岡田共訳『教育を支えるもの―教育関係の人間学的考察―』／黎明書房／1971 ヴィゴツキー、L. S.（柴田義松 訳）『文化的-歴史的的精神発達の理論』 学文社 2005年 柴田義松『ヴィゴツキー入門』，寺子屋新書，2006年		
参考文献	ボルノー著、石橋哲成訳『思索と生涯を語る』／玉川大学出版部／1991		

科 目 名	子どもとアート論		副題		
担 当 者	安村 清美・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに、実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。 安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。 斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。 その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。 2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。				
授業の方法・授業計画					
1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村・斉木）				
2	教育現場とアーティストの関わり①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について（安村）				
3	教育現場とアーティストの関わり②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション（安村）				
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む（安村）				
5	表現する身体：表現とプロセス、作品—実践記録、論文を読む（安村）				
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション				
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告				
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び（斉木）				
9	子どもと音環境（斉木）				
10	子どもとうた（斉木）				
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる（斉木）				
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども（斉木）				
13	文化と子ども（斉木）				
14	課題のディスカッション・プレゼンテーション（安村・斉木）				
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評（安村・斉木）				
期末					
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。				
評価方法及び評価基準	授業内での発言（20％）、プレゼンテーション（40％）、レポート（40％）などを基に総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。				
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。				
テキスト	特になし				
参考文献	『松本千代栄撰集 2 人間発達と表現』舞踊文化と教育研究の会（編者代表：安村清美）編、2007、明治図書 『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館 『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会 『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会 『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社				

科 目 名	子どもとことば論		副題	多文化共生時代の子どものことば	
担 当 者	内藤 知美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人―子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また児童文化財を含めた「モノ」を有効に活用し、実際の保育において子どものことばを育てる保育者としての実践力を探究する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもが多様ななかかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することの意味を問う。 2. ことばをめぐる最新の理論に触れると同時に、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を捉え、支援する具体的、実践的方法を学ぶ。				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育（0歳期）				
4	ことばの発達と保育（1 語発話の時期）				
5	ことばの発達と保育（2 語発話の時期）				
6	ことばの発達と保育（2 歳期・3 歳期）				
7	ことばの発達と保育（4 歳期・5歳期）				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①―多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②―ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①―絵本などの文化財が育むことば				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②―文化財を用いたことばの育ちあい				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末					
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	小論文（レポート） 7 0 %、児童文化財の実践 3 0 %				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる最新の理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書, 2013年、幼稚園教育要領（平成29年告示）、保育所保育指針（平成29年告示）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)				
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992）青木保『異文化理解』（岩波新書2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房2007）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。				

科 目 名	子ども環境学特論		副題		
担 当 者	仙田 考				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。 子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。				
授業のねらい・到達目標	学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	子ども環境学とは何か ― 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは				
2	子どものあそび環境 ― 時間、空間、集団、方法～遊環構造、こども時代のあそび環境				
3	子どものための安全環境 ― あそび環境におけるリスクとハザード				
4	子どもと保育環境（１） ― 幼稚園、保育園、認定こども園の園舎環境				
5	子どもと保育環境（２） ― 幼稚園、保育園、認定こども園の園庭環境				
6	子どもと住環境 ― 子どもの住まいの環境				
7	子どもと学校環境 ― 小学校環境と幼保小連携の可能性				
8	子どもの感性を育む環境 ― 保育実践におけるアート、表現と環境				
9	子どもと癒しの環境 ― 自然等の癒し環境				
10	子どもの地域施設環境 ― 園外保育、子育て施設等の環境				
11	子どもと環境学習 ― 自然、環境への気づきから持続発展教育へ				
12	子どものための都市・まちづくり ― 子どもにやさしいまちの在り方に向けて				
13	幼児教育施設等の視察（１） ― 認定こども園：園舎、園庭				
14	幼児教育施設等の視察（２） ― 幼稚園：園舎				
15	幼児教育施設等の視察（３） ― 幼稚園：園庭遊具、ビオトープ				
期末					
授業に関する連絡	でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	各授業での発表（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。				
事前・事後学習の内容	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。				
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。				
テキスト	特に使用せず。				
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社、2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社、1998年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社、2006年／仙田満『こどもの庭』世界文化社、2015年				

科 目 名	発達心理学特論		副題		
担 当 者	横尾 暁子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱う。授業では、国内及び海外における研究成果として論文を紹介する。受講者は論文を読み概要をまとめた上で自分の考察や問題意識とともに発表し、それに基づいて討議を行う。				
授業のねらい・到達目標	・発達心理学の最新の研究成果を学び、子どもの発達や子どもとの関わりについて深く思考し、子どもに対する多面的な理解を深める。 ・子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場で応用する力を身につける。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	心理学の研究法（実験、観察、調査、事例研究）				
3	研究計画と心理統計				
4	発達の基盤-遺伝と環境				
5	愛着の発達				
6	認知発達-表象の発達と概念の発達-				
7	認知発達-言語発達と社会的認知の発達-				
8	自己認知の発達				
9	道徳性と向社会的行動の発達				
10	問題解決行動の発達				
11	仲間関係の発達				
12	親子関係の発達-養育態度と発達-				
13	食行動の発達				
14	保育者と子どもの関係				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。 演習は、発表と討議を予定しており、履修生に資料作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、課題の提出（50%）に基づいて評価する。				
事前・事後学習の内容	事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等はよく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。 事後：各回の学習内容を整理して、学期末の課題作成の準備につなげること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。				
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。				
テキスト	特に使用せず。				
参考文献	杉村伸一郎・坂田陽子 『実験で学ぶ発達心理学』ナカニシヤ出版 2004 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎 『原著で学ぶ社会性の発達』ナカニシヤ出版 2008 山口真美・金沢創編著 『心理学研究法4 発達』 誠信書房 2011				

科 目 名	保育・教育課程研究		副題		
担 当 者	宮里 暁美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく循環のプロセス等について、事例やDVDを通して検討する。また、子どもとの対話的な関係の中から「学びの経験（履歴）」を編み出していくために必要な視点について、文献と実践を通して検討する。さらに、国内外の特色のある保育・教育課程について分担して調べ発表する。その内容を検討し、特色や相違点、共通点を整理する。また、グループディスカッションや全体討議の場面を多く設定し、学びを深めていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントについて整理する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。				
授業の方法・授業計画					
1	講義 保育の基本と計画：カリキュラムとは何か				
2	講義 保育の基本と計画：保育・教育課程・全体的な計画の意義				
3	講義 保育の基本と計画：遊びの中の学びを捉える				
4	文献研究「子どもの世界の探求」① 子どもが感じる世界を感じる				
5	文献研究「子どもの世界の探求」② 子どもと共に過ごすことの意味を考える				
6	文献研究「子どもの世界の探求」③ 保育と営みについて考える				
7	保育観察① 保育の実際の中に身をおいたからこそその気づきをまとめる				
8	保育観察② 保育の実際の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める				
9	発表・討議 保育の実際から気づいたことについて				
10	発表・討議 保育の実際の中にある意味を深める				
11	発表・討議 保育とは何か？				
12	講義 国外の特色ある保育・教育課程				
13	討議 様々な保育・教育課程の違いと共通点から見えたこと				
14	討議 豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について				
15	講義 学びの振り返りとまとめ（課題レポート提出）				
期末					
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：40％ 資料準備及び提案内容：30％ 課題レポート：30％				
事前・事後学習の内容	事前：特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	津守真・浜口順子編著『新しく生きる～津守真と保育を語る』フレーベル館、2009年 宮里暁美著『子どもたちの四季～小さな子をもつあなたに伝えたい大切なこと』主婦の友社、2014年 津守真著『子どもの世界をどうみるか 行為とその意味』NHKブックス1987年				
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008年 吉村真理子著『保育実践の創造』ミネルヴァ書房、2014年				

科 目 名	権利擁護特論		副題		
担 当 者	國見 真理子・長谷川 洋昭（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	本講義では、複雑化する社会におけるこどもたちの権利擁護に関する知識を深め、質の高い実践力を養うことを目的とする。ここでは人間の尊厳の保持、権利擁護活動の支援等の視点を重視する。 國見担当の総論では、人間尊重を巡るリーガルマインドの理解を深めることを目指す。権利擁護制度概要、憲法上の基本的人権、その他関連法規を把握し、こどもを巡る権利擁護に関する事例研究を行う。 長谷川担当の各論では、履修者が関心のある領域を設定し、具体的事例に基づき現状と課題を明確化する。権利擁護に係わる関係機関・者のジレンマの正体は何か、その理論的理解を目指す。				
授業のねらい・到達目標	1. 権利擁護の現状と課題を、具体的実践事例に基づき理解する。 2. 文献・資料の検索と収集、分析手法の習得を並行しつつ、権利擁護に関連する制度・関係機関・者のあるべき姿を具体的に理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション（國見・長谷川）				
2	憲法①：権利擁護と人権（國見）				
3	憲法②：権利擁護とこどもを巡る人権条約（國見）				
4	民法①：権利擁護と民法（國見）				
5	民法②：家族法（國見）				
6	行政法と権利擁護（國見）				
7	事例研究①（國見）				
8	事例研究②（國見）				
9	権利擁護と専門職（長谷川）				
10	児童虐待と権利擁護（長谷川）				
11	社会的排除と権利擁護（長谷川）				
12	施設内虐待と権利擁護（長谷川）				
13	事例研究①（長谷川）				
14	事例研究②（長谷川）				
15	総括（長谷川）				
期末					
授業に関する連絡	「でんでんぱん」を通じて履修者に適宜連絡する。				
評価方法及び評価基準	期末課題（40%）、コメントシート（30%）及び授業内の活動（30%）を総合的に勘案し評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、充分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること。				
履修上の注意	人権擁護に対する理解を深めるために、六法を授業の際に持参することを求める。				
テキスト	総論：最新版の『ポケット六法』（有斐閣） 各論：講義中に適宜資料等を配布する。				
参考文献	芦部信喜『憲法』（日本評論社） 秋元美世『ソーシャルワーカーのための法学』（有斐閣）				

科 目 名	障害児・者福祉特論（インクルーシブ論を含む）		副題		
担 当 者	新井 雅明				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	平成19年度の法改正により、わが国の障害児教育は、従来の「特殊教育」から「特別支援教育」へと大きく転換された。この背景には、障害の多様化、重度・重複化の進展に伴い、個別の教育的ニーズへの対応が求められたことと、国際的な潮流としての「インクルーシブ教育」の推進がある。個別の教育的ニーズへの対応とインクルーシブ教育の推進が、特別支援教育の重要課題となっているが、とりわけインクルーシブ教育の推進には大きな課題があり、様々な点から検討が必要になっている。現在の日本社会における障害児・者におけるインクルージョンの課題を分析し、その推進には何が必要かを、教育・福祉・保育の分野から検討する。また、広くソーシャルインクルージョンの課題にも視野を広げて研究する。				
授業のねらい・到達目標	1. インクルージョンの理念とその背景にあるものを理解する。 2. 日本社会におけるインクルージョンの課題を明らかにする。 3. 教育におけるインクルーシブ教育の現状と課題を理解する。 4. 福祉におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。 5. 保育におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	日本社会における排除と受容ー津久井やまゆり園事件から考えるー				
2	日本社会における排除と受容ーホームレスの支援を続けてー				
3	障害者の権利に関する条約とその背景				
4	合理的配慮について				
5	インクルージョンの理念とその背景				
6	特別支援教育とは何か				
7	インクルーシブ教育の実際				
8	諸外国におけるインクルーシブ教育				
9	インクルーシブ教育から見る「不登校・いじめ」				
10	インクルーシブ教育から見る「引きこもり・ニート」				
11	保育におけるインクルージョン				
12	ホームレス障害者、累犯障害者				
13	インクルーシブ教育と授業のユニバーサルデザイン				
14	インクルーシブな社会の実現のために①				
15	インクルーシブな社会の実現のために②				
期末					
授業に関する連絡	次回のテーマ・内容については授業内で連絡する。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（50%）及び発題発表（50%）に基づいて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に次回のテーマについて情報収集すること。事後には授業のまとめを行うこと。				
履修上の注意	社会的排除の問題について、広くニュースや文献を探って関心を持つことが望まれる。				
テキスト	「ホームレス障害者」鈴木文治著 日本評論社 「排除する学校」鈴木文治著 明石書店				
参考文献	「社会的排除」岩田正美著 有斐閣 「発達障害と少年犯罪」田淵俊彦著 新潮社				

科 目 名	地域福祉特論		副題		
担 当 者	和 秀俊				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	現代社会では、外国人家族の増加、核家族化や社会的孤立などに象徴される地域に共通する課題を解決するために、地域住民が支えあう地域福祉実践が求められている。この講義では、地域福祉実践の基礎となるコミュニティについて、近年のコミュニティ論を扱った学術書を読み込み、コミュニティの本質を探究し、今後の地域福祉実践に生かすことを目的とする。				
授業のねらい ・到達目標	1. 学術書の読み方を修得する。 2. コミュニティ論を探究し、地域福祉実践を学術的にアプローチできるようになる。 3. 学術的な概念、理論を適切に理解し、活用できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	コミュニティとは①～理念・概念				
3	コミュニティとは②～理論				
4	コミュニティとは③～歴史				
5	コミュニティの現状①～都市部				
6	コミュニティの現状②～農村部				
7	コミュニティの現状③～離島				
8	コミュニティの課題①～都市部				
9	コミュニティの課題②～農村部				
10	コミュニティの課題③～離島				
11	コミュニティの展望①～都市部				
12	コミュニティの展望②～農村部				
13	コミュニティの展望③～離島				
14	コミュニティケアの展望				
15	コミュニティケアシステムの展望				
期末					
授業に関する 連 絡	本授業では、学術書を履修生全員で読み込み、各回担当の履修生がレジュメ作成を担当し、発表することを課する。その際、概念、理論などを理解した上で、レジュメ作成および発表をすること。				
評価方法 及び評価基準	発表でのレジュメ作成（50％）、発表（50％）				
事前・事後 学習の内容	予定されている内容に該当する教科書の章を事前に読んでおくこと 授業の内容を必ず復習すること				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	未定（オリエンテーションの際に提示する）				
参考文献	広井義典・小林正弥編著「コミュニティ」勁草書房、伊豫谷登士翁・齋藤純一・吉原直樹「コミュニティを再考する」、吉原直樹「コミュニティ・スタディーズ」作品社				

科目名	生活環境学特論		副題		
担当者	山崎 さゆり				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子どもは住まいを中心とした地域環境の中で、様々なヒト・モノ・コトと関わりながら多くの学習をし、やがて自立した人間へと成長していく。子どもの健やかな成長・発達と人格形成を促進、あるいは阻害する生活環境について考える。 対象領域は住宅・施設環境、地域環境であり、これら相互の密接な関連性を念頭に置きつつ人的・物的の両側面における環境整備課題を明らかにし、その過程から深い学識を醸成する。また、子どもの発達を支える生活環境についてグローバルな視点を含めて論理的分析を行い、それらの実現のために必要な質の高い実践力を養う。 授業では、高齢者の生活空間を題材とし「人と住まい」の結びつきを考えていく中から、子どもの人格形成や人間発達にも深く関わる生活環境の在り方について、テキスト、および関連する文献・論文のレビューを行いながら、討論を進めていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの人間発達の観点から様々な生活環境の問題を捉え分析する中で深い学識を醸成する。 2. 生活行為と住空間の関係を多角的に捉え、人間相互の関係に及ぼす空間構造について理解する。 3. 子どもの生活空間形成の在り方、生活環境の改善の方向性について理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	各自の興味・関心に沿ったテーマの検討				
3	テーマに関連した文献の紹介				
4	テキストの輪読①				
5	テキストの輪読②				
6	テキストの輪読③				
7	テキストの輪読④				
8	テキストの輪読⑤				
9	課題の設定				
10	関連論文のレビューと討論①				
11	関連論文のレビューと討論②				
12	関連論文のレビューと討論③				
13	課題に関する研究動向と評価の検討				
14	課題のレポート作成				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	個別のメール、または学生支援課を通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	報告（30%）、討論（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前・事後共に、関連する文献・資料を日頃から収集してよく読み込んでおくと同時に、毎回の授業における報告内容をまとめておくこと。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し積極的に探究心をもって取り組み、問題意識が深まることを期待する。				
テキスト	外山義著「自宅でない在宅—高齢者の生活空間論」医学書院 ISBN978-4-260-33291-0				
参考文献	小林秀樹著「居場所としての住まい—ナワバリ学が解き明かす家族と住まいの深層」新曜社 高橋鷹志著「子どもを育てるたてもの学」チャイルド本社 北浦かほる著「世界の子どもの部屋—子どもの自立と空間の役割」井上書院 住宅総合研究財団編「現代住宅研究の変遷と展望」丸善 水村容子他編「私たちの住まいと生活」彰国社 長澤泰監修「高齢者のすまい」市ヶ谷出版社				

科 目 名	精神医学特論		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	今日の代表的な精神障害（mental disorders）を取り上げて、その成り立ちのメカニズムや精神医学的診断・治療などについて、生物学的・心理的・社会的な視点に立脚した重層的な知識を涵養する。同時に患者が体験する「病い（illness）」に加え、精神障害（mental disorders）が患者の生活・人生に及ぼす影響についても全人的な理解を深める。精神障害の客観的側面と主観的側面の双方を理解することを通して、精神障害（mental disorders）のある人に対する高度な専門性に基づく質の高い支援を実践する力量を養う。加えて精神医学上のトピックスについても講義を行う。授業は講義形式を基本とするが、学問的及び実践的な見地に立脚した活発な討議も重視する。				
授業のねらい・到達目標	1. 代表的な精神障害（mental disorders）に関する専門的知識を取得する。 2. 患者が体験する「病い（illness）」と生活・人生への影響について理解を深める。 3. 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 4. 精神医学および精神障害（mental disorders）に関する様々な論点につき、自ら問いを発し論じることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	精神医学の基礎知識				
2	精神科診断学				
3	精神症状学				
4	認知症性疾患				
5	統合失調症（概念，診断，疫学，成因仮説，症状）				
6	統合失調症（認知機能障害，特徴的行動特性，経過，予後，治療法）				
7	気分障害（概念，診断，成因仮説，症状）				
8	気分障害（経過，予後，治療法，特別なうつ病）				
9	神経症性障害・ストレス関連障害・身体表現性障害				
10	パーソナリティ障害，摂食障害				
11	小児期の精神障害				
12	身体的治療法				
13	精神療法				
14	環境・社会療法				
15	精神医療の現状				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが，授業毎に質問や議論の時間も確保する。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％），質問・発話・討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	〔事前学習〕 授業テーマにつき，文献などを使用して下調べをするとともに，生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。 〔事後学習〕 授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。				
履修上の注意	履修者は積極的に議論に参加すること。				
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。				
参考文献	ICD-10精神および行動の障害－臨床記述と診断ガイドライン新訂版（医学書院） 現代臨床精神医学第12版（金剛出版）				

科 目 名	臨床心理学特論		副題	認知行動療法	
担 当 者	久保 義郎				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	人間学の観点から、ケアリングの発想に基づく対人支援は重要であり、それを実現する具体的な技術・学問体系として、臨床心理学がある。 本講義では、主に認知行動療法の発想や技法を学び、現場での対人支援にそれらを生かし、効果的な実践の実現を狙う。受講者は予め提示された課題について学習した上で各自発表し、それに基づいて全員で討論する形式を主とする。現場における各人の問題意識を授業に反映させたい。 また、同一の事例であっても、障害福祉・リハビリテーションの観点と、発達支援・特別支援教育の観点とでは異なるアプローチが考え得ることを示したい。				
授業のねらい・到達目標	対人支援の現場で生じる問題について、認知行動論的な見立てとそれに基づくアプローチ方法を立案できるようになることを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション（授業の進め方）				
2	認知行動療法概説（レスポナント系）				
3	認知行動療法概説（オペラント系）				
4	認知行動療法概説（認知系）				
5	文献発表・討論、および補足講義（Activities of Daily Living）				
6	文献発表・討論、および補足講義（言語・コミュニケーション）				
7	文献発表・討論、および補足講義（社会性・Social Skills Training）				
8	文献発表・討論、および補足講義（親・家族）				
9	文献発表・討論、および補足講義（学校）				
10	文献発表・討論、および補足講義（療育）				
11	文献発表・討論、および補足講義（リハビリテーション：機能改善）				
12	文献発表・討論、および補足講義（リハビリテーション：代償訓練）				
13	文献発表・討論、および補足講義（環境調整）				
14	文献発表・討論、および補足講義（連携・協働）				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	初回を除いて受講者が資料作成と発表を行う。そのため、担当回数分、資料作成の時間が必要となるので、スケジュールの調整に注意すること。				
評価方法及び評価基準	発表内容70%、討論30%の割合で評価する。				
事前・事後学習の内容	事前学習としては、次回発表者の資料を読み、事後学習としては、発表と討論、および教員のコメントをノートしたものを読み直す。				
履修上の注意	講義科目ではあるが、発表や討論など、演習としての要素が多分にあるので、欠席をしないこと。				
テキスト	行動療法研究、特殊教育学研究、福祉心理学研究、カウンセリング研究の中からテーマに該当する論文を用いる。				
参考文献	福井 至 著『図解による学習理論と認知行動療法』培風館 2008 坂野雄二 著『認知行動療法』日本評論社 1995 熊野宏昭 著『新世代の認知行動療法』日本評論社 2012				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、「子ども人間学」の基礎文献を講読しつつ、各自が現段階で構想しているテーマに基づいた文献の検索を行う。上記の文献を講読をしながら論文のテーマを絞っていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて「子ども人間学」の基礎文献を講読し、理解する。 2. 修士論文のテーマを見つけるために、各自の関心に基づく必要な文献を収集し、講読し、理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー研究論文を書くことの意味				
2	研究論文の作成の方法				
3	研究論文の作成に向けた文献検索の方法				
4	「子ども人間学」の基礎文献の講読①				
5	「子ども人間学」の基礎文献の講読②				
6	「子ども人間学」の基礎文献の講読③				
7	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読①				
8	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読②				
9	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読③				
10	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読④				
11	各自が構想する研究テーマに沿った文献の講読⑤				
12	研究テーマの絞り込み				
13	研究テーマの絞り込み				
14	研究テーマに基づく発表①				
15	研究テーマに基づく発表①				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	自分自身のテーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結び付け、修士論文のテーマを絞り込んでいく。				
テキスト	「子ども人間学」の基礎文献として 1・佐伯胖 『子どもを人間としてみる』 ミネルヴァ書房 2・本田和子 『異文化としての子ども』 ちくま学芸文庫				
参考文献	生田久美子 『わざから知る』 東京大学出版会				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	安村清美				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、それぞれのテーマに基づいた論文指導を行う。 特に、子どもの身体と行為に現れる表現や子どもとアートに関して探究していく。このために、研究指導 I では、各自の関心に基づいた文献講読を中心に研究テーマの絞り込みを中心に進めていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向け、文献講読を通して「子ども人間学」に基づく基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。 2. 修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文を書くことの意味				
2	文献および先行研究の検索				
3	文献および先行研究リストの作成と発表				
4	文献リスト及び内容についての検討①				
5	文献リスト及び内容についての検討②				
6	文献リストと研究テーマの関わりについての検討①				
7	文献リストと研究テーマの関わりについての検討②				
8	主要文献の選択と講読①				
9	主要文献の選択と講読②				
10	主要文献の選択と講読③				
11	主要文献の選択と講読④				
12	主要文献の選択と講読⑤				
13	主要文献の選択と講読⑥				
14	研究テーマに基づく考察①				
15	研究テーマに基づく考察②				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	文献研究と共に子どもの表現に関する実践及び実態から学ぶ姿勢を必要とする。				
テキスト	各自の研究テーマに即して設定する。				
参考文献	「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版 「子どもたちの創造力を育むーアート教育の思想と実践」佐藤、今井編、2003、東京大学出版会 「経験としての芸術」ジョン・デューイ、栗田修訳、2010、晃洋書房、など				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	犬塚典子				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導Iでは、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。 修士論文のテーマとその周辺となる研究分野の検討、研究方法の習得、データや資料の収集と整理を目的として、基礎的文献を講読する。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて「子ども人間学」の基礎文献を講読し、理解する。 2. 修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献や情報を収集する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文を書くことの意味				
2	文献および先行研究の検索				
3	文献および先行研究リストの作成と発表				
4	文献リスト及び内容についての検討①				
5	文献リスト及び内容についての検討②				
6	文献リストと研究テーマの関わりについての検討①				
7	文献リストと研究テーマの関わりについての検討②				
8	主要文献の選択と講読①				
9	主要文献の選択と講読②				
10	主要文献の選択と講読③				
11	主要文献の選択と講読④				
12	主要文献の選択と講読⑤				
13	主要文献の選択と講読⑥				
14	研究テーマに基づく考察①				
15	研究テーマに基づく考察②				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	人間学総論，人間学研究法，各選択科目の履修で得られた知識や問いを基盤に，自らの研究関心を発展させ論文執筆のための構想を固めていく。				
履修上の注意	予習をして授業に臨むこと。また，授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	内藤知美				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導 I では、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。 内藤担当の研究指導 I では、保育の構造と保育者の専門性について探究を深める。特に、主体的な学び手である子どもが、人、場所、モノとの間で生起させる関係性に着目し、子どもの学びの可能性を広げるカリキュラムや保育者の専門的学びについて検討する。また海外の保育の動向（学びの共同性、社会文化的評価等）に触れながら新しい時代の保育を展望する。具体的には、文献講読を中心に、海外の動向を視野に入れ保育の構造や子どもの学びを支える方策について探究する。				
授業のねらい・到達目標	「子ども人間学」的観点から、子どもの学びとそれを支えるの保育の場の構造を探究するために、基礎資料を講読し、理解する。さらに、修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集し、論文の構想を検討する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けてー				
2	保育学・保育実践学研究の動向①				
3	保育学・保育実践学研究の動向②				
4	保育学・保育実践学研究の動向③				
5	保育学・保育実践学研究の動向④				
6	保育学・保育実践学研究の動向⑤				
7	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。①				
8	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。②				
9	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。③				
10	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。④				
11	『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』を読む。⑤				
12	各自の研究関心・テーマの検討①				
13	各自の研究関心・テーマの検討②				
14	各自の研究関心・テーマの検討③				
15	各自の研究関心・テーマの検討④				
期末					
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	泉千勢編著『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのかー子どもの豊かな育ちを保障するためにー』ミネルヴァ書房, 2017年				
参考文献	佐伯胖『幼児教育へのいざないー円熟した保育者になるためにー』東京大学出版会, 2014年 M. カー, 大宮勇雄、鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントするー「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房, 2013年				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰで絞り込んだ論文テーマに沿ってさらなる文献検索を行い、先行研究を吟味し、自らの研究テーマに基づく発表を重ねる。				
授業のねらい・到達目標	1・先行研究の文献を検索し吟味する。2・自らの研究テーマに沿った発表を重ねることで論文の作成及び報告に向かう意識を高める。				
授業の方法・授業計画					
1	研究指導Ⅱに関するイントロダクション				
2	文献検索の結果報告①				
3	文献検索の結果報告②				
4	文献検索の結果報告③				
5	先行研究の批判的講読①				
6	先行研究の批判的講読②				
7	先行研究の批判的講読③				
8	先行研究の批判的講読④				
9	先行研究を踏まえた、自らの論文作成の構想発表①				
10	先行研究を踏まえた、自らの論文作成の構想発表②				
11	中間報告を見据えた、論文の暫定的作成①				
12	中間報告を見据えた、論文の暫定的作成②				
13	中間報告を見据えた、論文の暫定的作成③				
14	中間報告に向けて発表の準備①				
15	中間報告に向けて発表の準備②				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50％）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	検索した先行研究の内容と自らの研究テーマを結び付け、次年度の中間報告に向かう意識を醸成していくこと。				
テキスト	先行研究の文献をテキストとする。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	安村清美				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの学びを踏まえ、文献購読に加え関連する先行研究を中心に理解を深める。 この授業では、子どもの身体と行為に現れる表現や子どもとアートに関して探究していく。このために、先行研究の講読及び理解に加え、子どもへの視点として、子どもに現れる身体行為を読み解くことを試みる。				
授業のねらい・到達目標	1．修士論文の作成に向け、文献および先行研究の講読を通して研究テーマに沿った基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。 2．修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	課題レポート発表とディスカッション①				
3	課題レポート発表とディスカッション②				
4	先行研究の検索と収集①				
5	先行研究の検索と収集②				
6	先行研究についての発表とディスカッション①				
7	先行研究についての発表とディスカッション②				
8	先行研究についての発表とディスカッション③				
9	先行研究についての発表とディスカッション④				
10	修士論文のテーマと構成・内容についての検討①				
11	修士論文のテーマと構成・内容についての検討②				
12	修士論文のテーマと構成・内容についての検討③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	研究発表③				
期末	期末なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	文献研究、先行研究の理解と共に子どもの表現及びアートに関する実践及び実態から学ぶ姿勢を必要とする。				
テキスト	先行研究リストから選択する				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	犬塚典子				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの学びを踏まえ、文献購読に加え、関連する先行研究の検討を中心に理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	1．修士論文の作成に向け、文献および先行研究の講読を通して研究テーマに沿った基礎的思考及び研究内容について理解し探究できるようになる。 2．修士論文のテーマ設定のために、必要な文献や先行研究を収集し、論文の方向性について検討する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	課題レポート発表とディスカッション①				
3	課題レポート発表とディスカッション②				
4	先行研究の収集①				
5	先行研究の収集②				
6	先行研究についての発表とディスカッション①				
7	先行研究についての発表とディスカッション②				
8	先行研究についての発表とディスカッション③				
9	先行研究についての発表とディスカッション④				
10	修士論文のテーマと構成・内容についての検討①				
11	修士論文のテーマと構成・内容についての検討②				
12	修士論文のテーマと構成・内容についての検討③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	研究発表③				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50％）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	人間学総論，人間学研究法，各選択科目の履修で得られた知識や問いを基盤に，自らの研究関心を発展させ論文執筆のための構想を固めていく。				
履修上の注意	予習をして授業に臨むこと。また，授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	内藤知美				
開 講 期	前期・後期	単位数	2単位	配当年次	1年次
授業の概要	研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰに引き続き、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。 内藤担当の研究指導Ⅱでは、保育の構造と保育者の専門性について探究を深める。特に、主体的な学び手である子どもが、人、場所、モノとの間で生起させる関係性に着目し、子どもの学びの可能性を広げるカリキュラムや保育者の専門的学びについて検討する。また海外の保育の動向（学びの共同性、社会文化的評価等）に触れながら新しい時代の保育を展望する。具体的には、論文の基本的な書き方を学ぶと共に、保育のカリキュラム、実践と評価、保育者の成長プロセス等に関わる研究論文を検討し、各自の研究課題を明確に修士論文のテーマにつなげる。				
授業のねらい・到達目標	「子ども人間学」的観点から、子どもの学びとそれを支えるの保育の場の構造を探究するために、基礎資料を講読し、理解する。さらに、修士論文のテーマを見つけるために、必要な文献を収集し、論文の構想を検討する。				
授業の方法・授業計画					
1	保育学研究の手法とその意義				
2	研究情報の収集と構造化の方法				
3	研究の倫理				
4	実践の場との関係構築の在り方				
5	研究テーマの設定と方法				
6	研究データの分析方法				
7	保育・保育実践研究を読む①				
8	保育・保育実践研究を読む②				
9	保育・保育実践研究を読む③				
10	保育・保育実践研究を読む④				
11	保育・保育実践研究を読む⑤				
12	各自の論文構想の検討①				
13	各自の論文構想の検討②				
14	各自の論文構想の検討③				
15	まとめ				
期末					
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50 %）及び研究発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	泉千勢編著『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのかー子どもの豊かな育ちを保障するためにー』ミネルヴァ書房, 2017年				
参考文献	佐伯胖『幼児教育へのいざないー円熟した保育者になるためにー』東京大学出版会, 2014年 M. カー, 大宮勇雄、鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントとするー「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房, 2013年				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ及びⅡでの指導を踏まえて、「子ども人間学」という理念に沿う形で、各自のテーマに基づいた論文指導を行う。その際には、最新の研究動向や先行研究論文を踏まえて、論文指導を進める。				
授業のねらい・到達目標	1・修士論文の最終テーマに沿って、引き続き先行研究の文献の講読を行い、論文作成の十全な準備を行う。				
授業の方法・授業計画					
1	研究指導Ⅲに関するイントロダクション				
2	先行研究の振り返りと自らの視点の確立①				
3	先行研究の振り返りと自らの視点の確立②				
4	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
9	中間報告会に向けての指導①				
10	中間報告会に向けての指導②				
11	中間報告会に向けての指導③				
12	中間報告会の結果の振り返りと修正事項の確認①				
13	中間報告会の結果の振り返りと修正事項の確認②				
14	研究指導Ⅲの総括				
15	研究指導Ⅳへ向けての課題の確認				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50％），中間報告会等での発表内容（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を引き続き行い、授業後には教員から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	修士論文の作成という最終目標を見据えて、計画的に論文を作成すること。				
テキスト	授業中に指示する。				
参考文献	授業中に指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	安村清美				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。ここでは、表現体である人間としての「子ども」の表現特性に関する理解を基本に置き、各自の研究内容に応じて論文執筆に必要な実践記録、文献や資料収集を進め、グループでの中間発表などの機会を設け指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの身体と行為に現れる表現及びアートに関して、子どもの身体へのまなざしの在り方や子どもに現れる身体行為をどう捉えるかなどを視点とし、修士論文の最終テーマに沿った実践の記録や文献・資料などの検索・収集を行う。 2. 論文の内容および構成を整え中間発表をおこなう。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて				
2	論文の構成に関する検討①				
3	論文の構成に関する検討②				
4	論文の構成に関する検討③				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
10	中間報告会に向けての指導①				
11	中間報告会に向けての指導②				
12	中間報告会に向けての指導③				
13	中間報告会に向けての指導④				
14	中間報告会に向けての指導⑤				
15	研究指導Ⅲの総括と研究指導Ⅳへの課題				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50％），中間報告会等での発表内容（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前、事後学習ともに、各自の研究テーマと計画に沿って各回具体化した課題の集積をしていく。				
履修上の注意	子ども・保育における表現や子どもとアートに関する実践や実態を研究の手掛かりにして研究・論文作成を進めることを前提としている。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	佐伯 胖				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。各自の研究内容に応じて論文執筆に必要な実践記録、文献や資料収集を進め、中間発表へ向けての指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	修士論文の最終テーマに沿った実践の記録や文献・資料などの検索・収集を行う。研究テーマに応じてフィールド調査を実施し、関連づける先行研究を検索、文献購読をする。中間発表をおこなう。				
授業の方法・授業計画					
1	佐伯研究室編『論文の作法：アイデア編』により、論文執筆へ向けての準備をする。				
2	論文の構成に関する検討①				
3	論文の構成に関する検討②				
4	論文の構成に関する検討③				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
10	中間報告会に向けての指導①				
11	中間報告会に向けての指導②				
12	中間報告会に向けての指導③				
13	中間報告会に向けての指導④				
14	中間報告会に向けての指導⑤				
15	研究指導Ⅲの総括と研究指導Ⅳへの課題				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50％），中間報告会等での発表内容（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前、事後学習ともに、各自の研究テーマと計画に沿って各回具体化した課題の集積をしていく。				
履修上の注意	修士論文研究としてふさわしい内容になるよう、周到な準備をする。				
テキスト	授業内で適宜指示する。				
参考文献	佐伯研究室編『論文の作法』				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	犬塚典子				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ、Ⅱの内容を踏まえ修士論文の研究テーマ及び研究計画具体化のための指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の最終テーマに沿った文献・資料などの検索・収集、考察を行う。 2. 論文の内容および構成を整え中間発表を行う。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション—論文の執筆に向けて				
2	論文の構成に関する検討①				
3	論文の構成に関する検討②				
4	論文の構成に関する検討③				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
10	中間報告会に向けての指導①				
11	中間報告会に向けての指導②				
12	中間報告会に向けての指導③				
13	中間報告会に向けての指導④				
14	中間報告会に向けての指導⑤				
15	研究指導Ⅲの総括と今後の検討				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50％），中間報告会等での発表内容（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回の指摘事項や課題について主体的に解決し，論文執筆を進める。				
履修上の注意	論文の完成に向けて，計画を立て着実に研究を行うこと。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	内藤知美				
開 講 期	前期・後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅲでは、研究指導Ⅰ～Ⅱでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。 内藤担当の研究指導Ⅲでは、これまでの研究指導の内容を踏まえ、各受講者の修士論文のテーマに即し、論文作成のための指導を中心に進めていく。具体的には、各自の研究内容に応じて必要な文献やデータの収集を進め、その検討を通して、各自の研究テーマおよび研究計画具体化のための指導を行う。				
授業のねらい ・到達目標	修士論文のテーマ決定とそのテーマに沿った文献やデータの収集・検討を進める。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の執筆に当たってー				
2	保育学領域および修士論文のテーマに沿った論文を読む①				
3	保育学領域および修士論文のテーマに沿った論文を読む②				
4	保育学領域および修士論文のテーマに沿った論文を読む③				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥				
11	中間報告会に向けての準備①				
12	中間報告会に向けての準備②				
13	中間報告会に向けての準備③				
14	中間報告会に向けての準備④				
15	中間報告および研究指導Ⅲの総括				
期末					
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	中間報告会等に向けての準備状況（50%），中間報告会等での発表内容（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索やデータ収集・整理を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーションー新しい学びの創造に向けて』，東京大学出版会，2015年ほか。				
参考文献	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を授業及び個別指導時に適宜指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲの指導を踏まえて、受講者は教員の指導を受けながら修士論文の執筆作業を始める。授業では、集中的に論文作成及び論文審査会での発表に向けて指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	1・教員の指導を受けながら、執筆作業に集中し、計画的に論文の完成に向かう。				
授業の方法・授業計画					
1	研究指導Ⅳに関するイントロダクション—論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文審査の発表会へ向けての指導①				
12	論文審査の発表会へ向けての指導②				
13	論文審査の発表会へ向けての指導③				
14	論文審査の発表会へ向けての指導④				
15	審査結果の振り返りと修正事項（最小に限る）の確認				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行及び完成状況（50％）、論文審査の発表会に向けての準備状況（50％）を基に評価する。あくまでも最終目標は論文の完成にある。				
事前・事後学習の内容	最終論文の完成に向けて、足りない文献を検索し補充しながら、完成稿を作成する				
履修上の注意	完成に向けて計画的に作業を進めること。				
テキスト	授業中に指示する。				
参考文献	授業中に指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	安村清美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、修士論文完成に向けて個別指導を行う。このために、子どもの表現や子どもとアートに関する文献・論文などの研究内容についてより理解を深め、各自の修士論文執筆を集中的に進められるよう指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの身体と行為に現れる表現及びアートに関して、子どもの身体へのまなざしの在り方や子どもに現れる身体行為をどう捉えるかなどを中心的視点とした論文を執筆する。 2. 指導を受けながら執筆作業に集中し論文を完成させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	研究発表会（論文審査）へ向けての指導①				
11	研究発表会（論文審査）へ向けての指導②				
12	研究発表会（論文審査）へ向けての指導③				
13	研究発表会（論文審査）へ向けての指導④				
14	研究発表会（論文審査）へ向けての指導⑤				
15	論文審査結果の振り返りと確認				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50％），研究発表会に向けての準備状況（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回の指摘事項や課題について主体的に解決し、論文執筆を進める。				
履修上の注意	論文の完成に向けて、計画的に進めること。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	佐伯 胖				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、修士論文完成に向けて個別指導を行う。このために、文献・論文などの研究内容についてより理解を深め、各自の修士論文執筆を集中的に進められるよう指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	指導を受けながら修士論文執筆作業に集中し論文を完成させる。				
授業の方法・授業計画					
1	佐伯研究室編『論文の作法：テクニカル編』をもとに、論文執筆の各様式を学ぶ。				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	研究発表会（論文審査）へ向けての指導①				
11	研究発表会（論文審査）へ向けての指導②				
12	研究発表会（論文審査）へ向けての指導③				
13	研究発表会（論文審査）へ向けての指導④				
14	研究発表会（論文審査）へ向けての指導⑤				
15	論文審査結果の振り返りと確認				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50％），研究発表会に向けての準備状況（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回の指摘事項や課題について主体的に解決し、論文執筆を進める。				
履修上の注意	論文の完成に向けて、計画的に進めること。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	犬塚典子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、修士論文完成に向けて個別指導を行う。研究内容についてより理解を深め、各自の修士論文執筆を集中的に進められるよう指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文を完成させ、今後の研究活動についての展望を得る。 2. 指導を受けながら執筆作業に集中し論文を完成させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	研究発表会（論文審査）へ向けての指導①				
11	研究発表会（論文審査）へ向けての指導②				
12	研究発表会（論文審査）へ向けての指導③				
13	研究発表会（論文審査）へ向けての指導④				
14	研究発表会（論文審査）へ向けての指導⑤				
15	研究活動の振り返りと今後の課題についての総括				
期末	試験なし				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50％），研究発表会に向けての準備状況（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	各回の指摘事項や課題について主体的に解決し，論文執筆を進める。				
履修上の注意	論文の完成に向けて，計画を立て着実に研究を行うこと。				
テキスト	授業内で指示する。				
参考文献	授業内で指示する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	内藤知美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅰ～Ⅲでの指導を踏まえて、子ども人間学の特定分野に焦点を当て、各テーマに基づいた論文指導を行う。 内藤担当の研究指導Ⅳでは、研究指導Ⅲの内容を踏まえ、各受講者の修士論文のテーマに即し、論文作成のための指導を中心に進めていく。具体的には、修士論文完成に向けての個別的な指導が中心となるが、受講者が共通に関心を持つべき論文や著書を用いて、適宜グループ指導も行っていく。				
授業のねらい ・到達目標	教員の指導を受けながら、修士論文を完成させる。今後の研究活動についてのテーマを持つ。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けてー				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文の完成に向けての個別指導⑩				
12	論文の完成に向けての個別指導⑪				
13	研究発表会へ向けての指導①				
14	研究発表会へ向けての指導②				
15	修士論文についての総括と今後の研究活動				
期末					
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	授業時間は受講生と教員が相談の上で決める。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50％），研究発表会に向けての準備状況（50％）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索やデータ収集・整理を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーションー新しい学びの創造に向けて』，東京大学出版会，2015年ほか。				
参考文献	各自の修士論文の研究テーマに沿った文献を授業及び個別指導時に適宜指示する。				

專門科目

(心理学専攻)

科 目 名	心理的アセスメントに関する理論と実践	副題	
担 当 者	宮森 孝史・筒井順子		
開 講 期	前期	単位数	2 単位
		配当年次	1 年
授業の概要	この授業では、心理支援専門職にとって必須の知識・技術となる心理的アセスメントの理論と実践的適用について学ぶ。具体的には心理的アセスメントの意義と理論的背景、心理に関する相談、助言、指導等での適切なアセスメント活動である。アセスメントに使用される各種心理検査、面接技法を目的に合わせて組み合わせること（バッテリー化）とその実施、結果の解釈と報告書の作成まで独力で出来ることが求められる。		
授業のねらい・到達目標	1. 学部で身に着けた各種心理検査、面接の基本的技法のスキルアップを目標とする。 2. 当該事例に合わせて検査バッテリーを組み、実施後の結果の整理と報告書の作成ができる。		
授業の方法・授業計画			
1	心理実践場面における心理アセスメントの役割と進め方		
2	心理アセスメントに有用な情報及びその把握の手法について		
3	心理に関する支援を要する者等に対して、関与しながらの観察について		
4	心理検査の種類、成り立ち、特徴、意義及び限界について		
5	心理検査の適性及び実施方法を学び、正しく実施し、検査結果を解釈することについて		
6	生育歴等の情報、行動観察及び心理検査の結果等を統合させて、包括的に解釈をするためのスキル		
7	適切に記録、報告、振り返り等を行うために		
8	報告書のまとめ方		
9	心理アセスメントから治療介入への移行について		
10	保健医療分野における事例の心理アセスメント		
11	福祉分野における事例の心理アセスメント		
12	教育分野における事例の心理アセスメント		
13	司法・犯罪分野における事例の心理アセスメント		
14	産業・労働分野における事例の心理アセスメント		
15	ケース検討会議での発表の仕方とチーム・アプローチのあり方を理解する		
期末			
授業に関する連絡	毎回、終了前10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生と疑問点の解消を共有し、次回に臨む。		
評価方法及び評価基準	実践分野を任意に一つ選択し、想定事例を考え（20％）、心理アセスメントの手続きの作成（30％）、実施、結果の解釈（30％）から、介入手続き（ゴール）設定（20％）までをまとめたレポートを作成し提出する。それらを基に評価する。		
事前・事後学習の内容	実践実習に係わる授業のため、事前・事後の内容は相互に関連することとなる。事前学習では、前回の授業内容を十分復習して授業に臨み、事後学習では一連のアセスメントの流れの中での現在の位置づけを確認し、次回に臨むこととする。		
履修上の注意	全講義に出席のこと。		
テキスト	以下の参考文献を中心に適宜指示する。		
参考文献	八木亜紀子（著）「相談援助者の記録の書き方―短時間で適切な内容を表現するテクニック」、中央法規出版、2012年 近藤直司（著）「医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技法を高めるハンドブック（第2版）」、明石出版、2015年 小海宏之（著）「神経心理学的アセスメント・ハンドブック」、金剛出版、2015年 津川律子（著）「精神科臨床における心理アセスメント入門」、西村書店、2009年 「臨床精神医学」編集委員会（編）「精神科臨床評価マニュアル（2016年版）」、アークメディア、2016年		

科 目 名	心の健康教育に関する理論と実践		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	予防的な心理支援として重要となる心の健康教育に関する理論と実践を学ぶ。心の健康教育における公認心理師の役割、心の健康教育を支える理論、心の健康教育の内容と方法について理解を深め、実践出来ることが求められる。				
授業のねらい・到達目標	対象者のニーズをアセスメントし、適切な内容、方法による心の健康教育を実施できる。広く地域住民に対して、メディアを活用するなどした、心の健康に関する広報普及活動が展開できる。				
授業の方法・授業計画					
1	こころの健康とは何か				
2	健康教育とな何か				
3	こころの健康教育を支える理論 1 カウンセリング理論				
4	こころの健康教育を支える理論 2 コミュニティ心理学				
5	こころの健康教育を支える理論 3 学校心理学				
6	こころの健康教育の内容1 自己との関わりを考える				
7	こころの健康教育の内容2 他者・集団との関わりを考える				
8	こころの健康教育の内容3 学習・キャリアの課題				
9	こころの健康教育の内容4 心身の健康とのつきあい				
10	こころの健康教育の内容5 危機対処・レジリエンス				
11	こころの健康教育の方法 1 プログラムの組み立て				
12	こころの健康教育の方法 2 講義型のプログラム				
13	こころの健康教育の方法 3 演習型のプログラム				
14	こころの健康教育の方法 4 メディアを使った広報活動				
15	こころの健康教育の実際				
期末					
授業に関する連絡	本授業では、前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。				
評価方法及び評価基準	授業ごとに担当者を決め発表を行う、その発表の内容（５０％）とレポートの内容（５０％）で評価する。				
事前・事後学習の内容	授業ごとの発表担当者はもとより、履修者全員、事前学習を十分行うこと。事後は、授業の内容をまとめておくこと。				
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。				
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。				
参考文献	『公衆衛生学』医歯薬出版 『健康のための行動変容』 『こころの健康を支えるストレスとの向き合い方』				

科 目 名	心理支援に関する理論と実践		副題			
担 当 者	伊東 正裕・新井 彩加					
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次	
授業の概要	心に関する相談、助言、指導その他の援助である心理支援に関する理論と実践を学ぶ。心理支援に関する代表的な理論と方法を理解し心理支援場面に応用出来ること、支援対象者の特性や状況に応じ支援方法の柔軟な選択・調整をおこなえるようになることが求められる。					
授業のねらい・到達目標	・心理支援に関する力動論に基づく心理療法の理論と方法を理解し説明出来る ・心理支援に関する行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法を理解し説明出来る ・その他の主要な心理療法の理論と方法を理解し説明出来る ・心理に関する相談・助言・指導等の活動に上記理論と方法を応用出来る ・心理支援を要する人々の特性や状況に応じて心理支援方法を適切に選択・調整出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方					
2	心理支援に関する力動論：フロイト世代					
3	心理支援に関する力動論：フロイト以降					
4	心理支援に関する行動論・認知論：行動療法					
5	心理支援に関する行動論・認知論：認知療法					
6	心理支援に関する行動論・認知論：認知行動療法					
7	心理支援に関するその他の理論・方法：パーソン・センタード、家族療法、内観法等					
8	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：力同論					
9	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：行動論・認知論					
10	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：その他の理論・方法					
11	心理支援対象者の特性・状況と力同論との関係					
12	心理支援対象者の特性・状況と行動論・認知論との関係					
13	心理支援対象者の特性・状況とその他の理論・方法との関係					
14	心理支援をおこなう者に共通な態度、考え方					
15	全体のまとめ					
期末	レポート					
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。					
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中での課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。					
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を要する。					
履修上の注意						
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。					
参考文献	授業中に適宜紹介する。					

科 目 名	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践		副題			
担 当 者	渡邊 由己					
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次	
授業の概要	家族・集団・地域社会の特徴を理解し、これらと心との関係を考慮した心理支援が出来ることは共生社会実現を志向する心理専門職に必須の知識と技法である。この授業では家族心理学やコミュニティ心理学の知見を応用しながら家族理解、集団理解、地域理解の理論とこれらに存在する様々な問題、および問題に対する支援、家族や地域の人々、多職種での連携と協働による支援それぞれの理論と方法、実践について学ぶ。					
授業のねらい・到達目標	・家族と構造と機能を理解し家族関係の課題とその克服に関する心理学的理論と知見を説明出来る ・家族関係の課題解決に対して心理支援の理論と技法を適切に導入出来る ・地域社会や集団（コミュニティ）の構造と機能を理解しそれらの課題とその克服に関する心理学的理論と知見を説明出来る ・地域社会や集団（コミュニティ）の課題解決に対して心理支援の理論と技法を適切に導入出来る					
1	授業オリエンテーション					
2	家族の構造と機能、現代家族の特徴					
3	家族関係と精神的健康、					
4	家族関係のアセスメント法					
5	家族の心理支援における代表的な介入技法					
6	地域社会と集団（コミュニティ）の構造と機能、現代地域社会の特徴と課題					
7	地域や集団（コミュニティ）のアセスメント法					
8	地域や集団（コミュニティ）の支援プログラム					
9	支援プログラムの評価理論					
10	支援プログラムの実際例と課題					
11	コンサルテーションとコラボレーション					
12	地域や集団支援チーム形成に関する心理学的理論					
13	地域や集団支援チームによる活動の実際と課題					
14	地域や集団（コミュニティ）への心理支援専門職の基本的態度と倫理					
15	まとめと発展					
期末						
授業に関する連絡	授業は講義形式を主体とするが、アセスメントに関する部分は演習も取り入れる。学生への連絡が必要な場合はポータルサイトででんばんを通しておこなう。					
評価方法及び評価基準	最終レポート（50％）、何度か課す小レポート（30％）、授業中の発言等取組の積極性（20％）で総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	毎回の授業で配布する資料に基づき、予習・復習内容を具体的に指示する。					
履修上の注意	心理支援者としてこの授業がどう役立つのか、修士論文に役立つことはないだろうかなど、常に問題意識を持って積極的に関与されたい。					
テキスト	テキストは特に指定しない。授業中に資料を配布する。					
参考文献						

科 目 名	カウンセリング特論		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	前期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1年次・2年次
授業の概要	心理支援の中心的技法でもある心理カウンセリングの理論と技法について理解を深める。代表的なカウンセリングの理論と技法を振り返った後、心理力動論に基づくカウンセリングの過程を詳しく検討していく。カウンセリング場面における対人力動を理解出来ることは、多様な人々が共生するためのコミュニケーションにおける感情交流で生じる軋轢の理解と支援にも役立つはずである。対人関係における力動性を支援に活かせる力をつけることが目標である。				
授業のねらい・到達目標	・ カウンセリングに関連する主要な理論、技法について理解し説明が出来る ・ 対人関係における力動のありようを、精神分析等の理論を通して理解し説明出来る ・ カウンセリング事例から、対人関係における力動性をどのように心理支援に活かすことが出来るか考察し説明することが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	カウンセリングという心理支援の機能と役割				
3	カウンセリングの代表的な理論				
4	力動的立場における人間理解：フロイト、ユング、アドラー				
5	力動的立場における人間理解：フロイト以降 イギリス対象関係論				
6	力動的立場における人間理解：フロイト以降 アメリカ自我心理学				
7	カウンセリング関係の力動的理解：洞察と抵抗、転移と逆転移				
8	事例を用いた対人力動性の理解：子どもの事例				
9	事例を用いた対人力動性の理解：青年期の事例				
10	事例を用いた対人力動性の理解：成人の事例				
11	事例を用いた対人力動性の理解：保健・医療分野の事例				
12	事例を用いた対人力動性の理解：福祉分野の事例				
13	事例を用いた対人力動性の理解：産業・労働分野の事例				
14	事例を用いた対人力動性の理解：司法・犯罪分野の事例				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中での課題等の取組（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	授業中に具体的な説明をおこなう。事前・事後合わせて 2 時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に適宜資料を配布する。				
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	精神医学特論		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1・2年
授業の概要	精神医学の歴史、症候学、病院論など精神医学の見方、考え方を学び、心理学的理論モデルとの違い、実践における協働のあり方を学ぶ。具体的には、現在の症状分類の基本である「ICD-10精神および行動の障害」（WHO）、「DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き」（米国精神医学会）を用い、現代精神医学の基礎知識の獲得を目指す。				
授業のねらい・到達目標	代表的な精神障害に関する専門的知識を取得する。 患者が体験する「病い」と生活・人生への影響について理解を深める。 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 精神医学および精神障害に関する様々な論点につき、自ら問いを発し論ずることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	精神医学の基礎				
2	精神科診断学				
3	精神症状学				
4	認知症疾患				
5	統合失調症（概念、診断、疫学、成因仮説、症状）				
6	統合失調症（認知機能障害、特徴的行動特性、経過、予後、治療法）				
7	気分障害（概念、診断、成因仮説、症状）				
8	気分障害（経過、予後、治療法、特別なうつ病）				
9	神経症性障害、ストレス関連障害、身体表現性障害				
10	パーソナリティ障害、摂食障害				
11	小児期の精神障害				
12	身体的治療法				
13	精神療法				
14	環境・社会療法				
15	精神医療の現状				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが、授業毎に質問や議論の時間も確保する。				
評価方法及び評価基準	レポート（70%）、質問・発話・討議への参加度（30%）				
事前・事後学習の内容	事前学習は、授業テーマにつき、文献などを使用して下調べをするとともに、生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。 事後学習は、授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。				
履修上の注意	履修者は積極的に議論に参加すること。				
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。				
参考文献	I C D - 1 0 精神および行動の障害 - 臨床記述と診断ガイドライン新訂版（医学書院） 現代臨床精神医学第12版（今後出版）				

科目名	リハビリテーション心理学特論		副題		
担当者	宮森 孝史				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年
授業の概要	リハビリテーション心理学は、障害や慢性疾患の研究、予後、治療に対して、心理学的知見と理解を適応するに特化した心理学の専門分野であり、ここでの公認心理師には、関係する要因（生物学的、心理的、社会的、職業的、政治的要因）すべてを考慮に入れて、個人が最適な身体的、心理的、対人的機能を働かすことができるように援助することが求められる。具体的には、身体障害、知的障害及び精神障害、高次脳機能障害について概説でき、障害者（児）、高齢者の心理社会的課題及び必要な支援について説明できるようになることである。				
授業のねらい・到達目標	1. リハビリテーション心理学は心理学の諸領域が相互に関連しあって成り立っている学際領域である。これまで学んできた心理学の諸領域の関連性が説明できるようになる。 2. 障害の心理社会的意味を説明することができる。				
授業の方法・授業計画					
1	リハビリテーションとリハビリテーション心理学の位置づけ				
2	心理学におけるリハビリテーション心理学の位置づけ				
3	リハビリテーション心理学と心理学的リハビリテーション				
4	リハビリテーション心理学各論①：脊髄損傷・肢節切断のリハビリテーション心理学				
5	リハビリテーション心理学各論②：慢性疼痛のリハビリテーション心理学				
6	リハビリテーション心理学各論③：リハビリテーションにおける神経心理学的実践				
7	リハビリテーション心理学各論④：高次脳機能障害のリハビリテーション				
8	リハビリテーション心理学各論⑤：発達障害のリハビリテーション心理学				
9	リハビリテーション心理学各論⑥：認知リハビリテーションの考え方				
10	リハビリテーション心理学各論⑦：精神障害のリハビリテーション心理学				
11	リハビリテーション心理学各論⑧：リハビリテーション心理学から見た認知症				
12	リハビリテーション心理学各論⑨：障害受容について				
13	職業的リハビリテーションにおけるリハビリテーション心理学の役割と貢献				
14	ポジティブ心理学からリハビリテーション心理学への貢献				
15	リハビリテーション・チームにおける心理師の位置づけと適正				
期末					
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生との共有化をはかり、理解を深めることとする。				
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50％）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50％）。それらを基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	講義の展開に合わせ適宜、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読んで授業に望むこと。また、講義で学んだこと（各論）がリハビリテーションの考え方（思想）にどのように発展するのかを常に考えながら事後学習に努めること。				
履修上の注意	全講義に出席のこと。				
テキスト	以下の参考文献の中から、各回に関連のある章を取上げ授業を進める。				
参考文献	Frank, RG., Rosenthal, M., & Capla, B., "Handbook of Rehabilitation Psychology, 2nd ed." APA, 2010. 千野直一（監）・福原彰夫・才藤栄一（編）「現代リハビリテーション医学（改訂第4版）」、金剛出版、2017年 金田嘉清（著）「リハビリテーション（放送大学教材）改訂新版」、放送大学教育振興会、2013年				

科 目 名	精神保健医療心理学特論		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2年
授業の概要	公認心理師法の成立は、心理支援の専門職が安定してその役割を果たすことにつながり、精神保健や精神障害の心理支援領域においても大きな意味をもつ。これからは比較的近い専門性を有する他職種とどのような関係性のもとで質の高い心理支援をおこなえるかが課題となる。この授業では、精神保健医療・福祉に関わる行政制度、法規、専門職の現状と課題を解説し、その上で公認心理師法に規定される役割を踏まえつつ、精神保健医療における心理支援専門職の役割と機能を考察する。				
授業のねらい・到達目標	精神障害者を取り巻く環境について説明できる 精神保健医療、福祉に関する法律、制度等を説明できる 関連専門職について説明ができ、連携を取ることができる 精神保健医療等の現場において、公認心理師として適切な役割を果たせることができる				
授業の方法・授業計画					
1	現代社会における精神障害者の排除				
2	精神障害者排除の歴史				
3	精神保健福祉法の理解				
4	医療観察法の理解				
5	障害者総合支援法の理解				
6	精神保健医療に関する行政制度の理解				
7	精神科医療機関における精神障害者への支援				
8	保健機関における精神障害者への支援				
9	福祉機関における精神障害者への支援				
10	司法領域における精神障害者への支援				
11	関係職種の専門性と役割				
12	関係職種との連携				
13	精神科医療機関における公認心理師の役割				
14	保健機関における公認心理師の役割				
15	福祉及び司法機関における公認心理師の役割				
期末					
授業に関する連絡	本授業では、前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％）、発言や討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	事前としては、各回のテーマについて文献などにより下調べをしておくこと。 事後としては、授業内で配布したプリント等により、知識を整理しておくこと。				
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。				
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。				
参考文献	岡田靖雄著『日本精神科医療史』医学書院 『精神保健福祉法詳解』中央法規 町野朔ほか著『触法精神障害者の処遇』信山社 篠崎英夫著『精神保健学序説』へるす出版				

科目名	コミュニティ臨床心理学特論	副題	
担当者	渡邊 由己		
開講期	後期（隔年）	単位数	2単位
		配当年次	1年次・2年次
授業の概要	社会問題が複雑・多様化してくるなかでは、単一の視点や方法では解決が難しく、より多面的で協働的な介入が必要になってくる。この授業では、コミュニティ支援において鍵となるチーム支援について、その基本理論と実際を学ぶ。また、コミュニティへの介入は介入プログラムとして体系的に実施される。この介入効果を評価する、プログラム評価の理論と方法についても学ぶ。		
授業のねらい・到達目標	・コミュニティについての考え方の歴史的変遷と、現代コミュニティが抱える臨床心理学的課題を理解し説明出来る ・チームの種類、機能、形成に関する心理学的理論と知識を理解し説明出来る ・心理支援専門職のコミュニティ・ケアチームにおける機能と役割、課題を理解し説明出来る ・プログラム評価の理論と方法、評価プロセスについて理解し説明出来る ・心理支援プログラムの具体例と評価について理解し説明出来る		
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	コミュニティの定義：歴史的変遷と新しいコミュニティの考え方		
3	コミュニティの変化と精神的健康との関係		
4	コミュニティへの心理支援：コンサルテーションとコラボレーション活動の実際		
5	コミュニティへの心理支援：予防と危機介入		
6	支援チームの背景理論：チームの種類と機能		
7	支援チームの背景理論：チームワークとチームビルディング		
8	コミュニティ・ケアにおける心理支援専門職の役割と課題		
9	コミュニティ支援のための臨床心理学的予防・介入プログラムの実際		
10	プログラム評価の理論：プロセス評価		
11	プログラム評価の理論：アウトカム評価		
12	プログラム評価の課題：計画と実施上の課題		
13	プログラム評価の課題：効果評価上の課題		
14	現代的コミュニティにおける臨床心理学的特徴と課題		
15	全体のまとめ		
期末	レポート課題		
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の掲示機能を用いておこなう。		
評価方法及び評価基準	授業での課題に対する評価（30%）、期末のレポート課題（70%）		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の取り組みを求める。		
履修上の注意	「家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践」のアドバンスとなる。		
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科 目 名	認知行動療法特論		副題		
担 当 者	久保 義郎				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 年次・ 2 年次
授業の概要	心理療法には様々な理論と技法があるが、認知行動療法は認知心理学など心理学基礎研究の知見に基づき実証性の高い心理療法として近年大きな発展をみている。この講義では認知行動療法のこれまでの歴史的発展を概観した後、最新の第三世代認知行動療法の理論と実践について具体的に学んでゆく。また、治療効果に関する研究知見にも注目し、心理療法的介入効果の実証手続きと、その課題について理解を深める。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 認知行動療法の理論的枠組について、歴史的変遷を踏まえて理解し説明出来る ・ 第三世代認知行動療法の具体的理論と手法について理解し説明出来る ・ 治療効果検討の基本的な実験デザインについて理解し説明出来る ・ 上記に基づき実際の介入効果検討における課題を理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	行動療法、認知療法、認知行動療法				
3	第一世代認知行動療法の特徴と課題				
4	第二世代認知行動療法の特徴と課題				
5	第三世代認知行動療法：マインドフルネス認知行動療法				
6	第三世代認知行動療法：スキーマ療法				
7	第三世代認知行動療法：ACT				
8	第三世代認知行動療法の実践例：医療分野の事例				
9	第三世代認知行動療法の実践例：教育分野の事例				
10	第三世代認知行動療法に関する研究				
11	治療効果検討における基本的実験デザイン				
12	治療効果検討における課題				
13	第三世代認知行動療法の課題と展望				
14	認知行動療法の訓練、研修など				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて 2 時間を要する。				
履修上の注意					
テキスト	特に指定しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	臨床心理学特論		副題		
担 当 者	久保 義郎				
開 講 期	後期(隔年)	単位数	2 単位	配当年次	1 年次・2 年次
授業の概要	臨床心理学は人の病、障がい、生活や人間関係上の様々な困難などから生じる心の問題を、「心理内界」、「行動や認知」、「人間的関わり」などの側面から解明し、解決への道筋をつけようとしてきた。この授業ではいくつかの事例を題材として、こうした多面的な視点で事例を見ていくことをおこない、心理支援の専門職としての知識と技術の幅を拡げていくことを目標とする。				
授業のねらい ・到達目標	・心理支援に関する複数の理論を体系的に理解し説明出来る ・心理支援に関する複数の理論を用いて事例を多面的に考察し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関する理論の確認：心理テストに関する理論				
3	心理支援に関する理論の確認：心理面接に関する理論				
4	心理支援に関する理論の確認：臨床心理学的地域支援に関する理論				
5	心理支援に関する理論の確認：心理支援対象者理解に関する理論				
6	心理支援に関する理論の確認：医学的診断に関する理論				
7	教材事例：子どもの事例				
8	教材事例：青年期の事例				
9	教材事例：成人の事例				
10	教材事例：高齢者の事例				
11	教材事例：障がい者の事例				
12	教材事例：精神疾患の事例				
13	教材事例：不登校、ひきこもりの事例				
14	教材事例：虐待、DV、PTSDの事例				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の取り組み（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業で資料を配布する。				
参考文献	授業で適宜紹介する。				

科 目 名	心理支援技術演習	副題			
担 当 者	伊東秀幸・伊東正裕				
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	学部で培ってきた心理支援に関する基礎知識と技術を再確認し、より具体的な事例検討を通して、適応の可能性と限界を考える機会とする。これにより、心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じて適切な支援方法を選択・調整することができるようになる。				
授業のねらい ・到達目標	・心理支援に関する知識と技術を整理し、事例等に適切に当てはめることが出来る ・事例に則して複数の心理支援法の可能性を考えることが出来る ・支援領域別に心理支援計画を立てることが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関する知識の整理：カウンセラーの態度				
3	心理支援に関する知識の整理：精神力動論的人間理解				
4	心理支援に関する知識の整理：認知・行動論的人間理解				
5	心理支援に関する知識の整理：人間学的人間理解				
6	心理支援に関する知識の整理：内観と森田神経質				
7	模擬事例を用いた心理支援の具体的適用：子どもの事例				
8	模擬事例を用いた心理支援の具体的適用：成人の事例				
9	心理支援計画の作成：保健・医療分野の事例				
10	心理支援計画の作成：福祉分野の事例				
11	心理支援計画の作成：教育分野の事例				
12	心理支援計画の作成：産業・労働分野の事例				
13	心理支援計画の作成：司法・犯罪分野の事例				
14	心理支援技術の適用と倫理的配慮				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の課題等への取り組み（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて1時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	公認心理師総合演習 I		副題		
担 当 者	渡邊 由己・櫻井 優太				
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	これまでの講義、演習、実習で各論的、領域的に形成された知識や技術を総動員し、高度な専門性を発揮して心理支援を実践出来る公認心理師を目標とした総合的な演習をおこなう。ここには心理支援に関する課題を用いた心理学諸領域の知識や理論の関係性整理と体系化、模擬的事例を用いて心理検査の種類や心理支援の技法を適切に選択しケース・フォーミュレーションをおこなうこと、検査報告書やケース記録の記述力向上や各種所見書、依頼書、申し送り書等の基本的書き方理解などが含まれる。また、心理支援に関する研究データの読み方や関連知識についても整理し体系化を図る。				
授業のねらい ・到達目標	・公認心理師に必要な知識を整理し、体系的・総合的に活用出来る。 ・模擬事例からケース・フォーミュレーションをおこなうことが出来る ・検査報告書、ケース記録を適切に記述し、所見書・依頼者・申し送り書等の基本的書き方を理解し作成出来る ・心理支援に関する研究を理解し、データを適切に読み取ることが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関係する心理学基礎事項の確認テスト				
3	確認テストの解説				
4	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：インテーク時の見立て方				
5	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：ラ・ポール形成と支援課題の焦点化				
6	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：心理検査の活用				
7	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：所見書、ケース記録の書き方と活用				
8	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：具体的技法の選択と実施				
9	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：ケース会議の準備と開催、開催後の対応				
10	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：スーパービジョンの活用				
11	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：直面化と転機				
12	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：終結、中断、他機関紹介、ケースのまとめ				
13	心理支援に関する研究データの読み方				
14	心理支援に関する知識整理の確認テスト				
15	確認テストの解説、全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（40％）、授業中の課題等への取り組み（60％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて1時間の学習を求める。				
履修上の注意	模擬事例は連続的な内容も扱うため、欠席は可能な限り少なくすること。				
テキスト	特に使用しない。資料を配布する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科目名	公認心理師総合演習Ⅱ		副題		
担当者	渡邊 由己・櫻井 優太				
開講期	後期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	公認心理師総合演習Ⅰに引き続き総合的な演習をおこなう。模擬的事例を用いた、多職種連携および協働による支援の計画策定、事例に対して関連する法律や行政制度の確認と、そのもとでの公認心理師の立場の理解、様々な事例を題材とした見立てや支援プロセスの検討をおこなうための討論、事例の中で突発的な状況変化の情報を挿入し、公認心理師としての対応を検討させること、倫理的・職務的な不適切行為の指摘と対応を考えさせる課題などを用いた実践的演習とする。また、心理学的調査や実験、介入の効果研究などによる知見を現場実践に導入する際の手法や留意点についても演習として取り上げる。				
授業のねらい・到達目標	・ 模擬事例から多職種連携・協働による心理支援の計画立案をおこなうことが出来る ・ 事例に対して関連する法律や行政制度を確認し、公認心理師との関連を理解し説明することが出来る ・ 事例を題材として見立てや支援法について討論をおこなうことが出来る ・ 模擬事例において突発的な出来事に対する柔軟で適切な発想と対応を考えることが出来る ・ 現場における研究実施の一連の計画、配慮、データ収集と分析について理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関する知識の確認テストと解説				
3	模擬事例を用いた演習：多職種連携・協働による心理支援計画の立案				
4	事例を用いた、法律、行政制度と公認心理師業務との関係確認				
5	事例を題材としたケース検討：保健・医療分野				
6	事例を題材としたケース検討：福祉分野				
7	事例を題材としたケース検討：教育分野				
8	事例を題材としたケース検討：産業・労働分野				
9	事例を題材としたケース検討：司法・犯罪分野				
10	突発的な事態を挿入した事例での対応検討：子どもの事例				
11	突発的な事態を挿入した事例での対応検討：成人の事例				
12	心理支援のフィールド研究における計画と配慮				
13	心理支援のフィールド研究におけるデータ収集と分析				
14	公認心理師と人間学的学識との関わり				
15	心理支援に関する技術の確認テストと解説				
期末	レポート				
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の課題等への取り組み（50％）で総合的に判断する				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて1時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	保健医療分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	伊東秀幸				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	テーマは保健医療分野に関わる公認心理師の実践である。心の問題で不適応に陥っている人、心理的葛藤や家族関係・対人関係の困難から臨床心理学的な症状や問題を呈している人、慢性疾患を抱えた人、災害・犯罪被害等で心理的ケアが必要な人、心神喪失のため犯罪に至ってしまった人への臨床心理学的支援に関わる理論の獲得と、病院・診療所（精神科、心療内科等）、保健所、精神保健センター等における、心理査定、心理療法に加え、デイケアやコンサルテーションなどの活動内容、プロセスについて理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	保健医療分野の機関において、公認心理師として適切な実践ができるようになるため、機関と心理学的知識と技術を結びつけられるようにすることが授業の目的であり、以下の5点を到達目標とする。 ・保健医療機関の機能を説明できる。 ・保健医療機関の対象者を説明できる。 ・保健医療機関の公認心理師の役割を説明できる。 ・保健医療機関で必要な知識、技術を説明できる。 ・対象者への適切な支援を考察できる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業の進め方について				
2	保健医療分野の機関について				
3	精神科病院における公認心理師の役割				
4	精神科病院の事例検討				
5	精神科クリニックにおける公認心理師の役割				
6	精神科クリニックの事例検討				
7	精神科デイケアにおける公認心理師の役割				
8	精神科デイケアの事例検討				
9	医療観察病棟における公認心理師の役割				
10	医療観察病棟の事例検討				
11	保健所・保健センターにおける公認心理師の役割				
12	保健所・保健センターの事例検討				
13	精神保健福祉センターにおける公認心理師の役割				
14	精神保健福祉センターの事例検討				
15	コンサルテーションの方法				
期末					
授業に関する連絡	本授業では、講義と事例検討によって理解を深める。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％）、発言や討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	事前としては、各回のテーマについて文献などにより下調べをしておくこと。 事後としては、授業内で配布したプリント等により、知識を整理しておくこと。				
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。				
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。				
参考文献	「精神医学的面接」 みすず書房 「解決のための面接技法」 金剛出版				

科 目 名	教育分野に関する理論と支援の展開		副題			
担 当 者	渡邊 由己					
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次	
授業の概要	テーマは教育分野に関わる公認心理師の実践である。学校内での対人関係困難等の学校不適応、不登校傾向、学業困難やいじめ、ハラスメント、ひきこもり等の問題に関わる理論の獲得と、心理支援の展開について、スクールカウンセリングから大学学生相談まで含めて理解する。さらに学校内の相談室、教育センター、各種教育相談機関等において、本人との面接、保護者との面接、教員へのコンサルテーション、必要に応じた他機関との連携支援活動等、教育分野に関する広汎な支援の実践についても理解を深める。					
授業のねらい・到達目標	・教育現場をめぐる臨床心理学的課題について理解し説明出来る ・いじめ、ハラスメントに対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・学業困難、進路未決定に対する心理支援の実践を理解し説明出来る。 ・不登校、ひきこもりに対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・心理支援における教員や保護者、他機関との連携に関する実践を理解し説明出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方					
2	教育現場における臨床心理学的課題					
3	いじめをめぐる心理支援の実際					
4	キャンパス・ハラスメントをめぐる心理支援の実際					
5	生徒の学業困難に関する心理支援の実際					
6	大学生の学習支援に関する心理支援の実際					
7	進路選択に関連した心理支援の実際					
8	大学生のキャリア探索をめぐる心理支援の実際					
9	不登校生徒に対する心理支援の実際					
10	青年期ひきこもりに対する心理支援の実際					
11	スクールカウンセリング、学生相談の役割と実際					
12	教育センターなど外部教育支援機関における心理支援の役割と実際					
13	教員や保護者との連携・協働による心理支援の実際					
14	教育分野における心理支援の課題					
15	全体のまとめ					
期末	レポート					
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を利用しておこなう。					
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。					
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。					
履修上の注意						
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。					
参考文献	授業中に適宜紹介する。					

科 目 名	福祉分野に関する理論と支援の展開		副題			
担 当 者	宮森 孝史					
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年	
授業の概要	テーマは福祉分野に関わる公認心理師の実践である。子どもをめぐる様々な問題、虐待、非行、障害児・者、DV被害、高齢者の問題など、福祉に関わる幅広い領域に関する臨床心理学的理論の獲得と、児童相談所、療育施設、心身障害者福祉センター、障害者作業所、女性相談センター、老人福祉施設等における支援活動の実践について理解を深める。					
授業のねらい・到達目標	1. 日常生活を営む上で生じる困難、障害を緩和、解決するための社会制度、福祉サービスにおける心理職の専門性と役割を理解し、説明できる。 2. 各領域における支援のための理論の理解と具体的支援の方法を身につけ、説明できる。					
授業の方法・授業計画						
1	福祉分野における心理師の役割について					
2	子ども・家庭福祉分野の理論と支援①：児童福祉法と児童相談所の仕事					
3	子ども・家庭福祉分野の理論と支援②：社会的擁護と児童福祉施設					
4	子ども・家庭福祉分野の理論と支援③：子育て支援と地域児童福祉					
5	子ども・家庭福祉分野の理論と支援④：児童虐待への対応					
6	障害児・者福祉分野の理解と支援①：障害児支援					
7	障害児・者福祉分野の理解と支援②：障害者支援					
8	障害児・者福祉分野の理解と支援③：障害者福祉支援の現状と心理職の役割					
9	高齢者福祉分野の理解と支援①：少子超高齢社会の現状と問題					
10	高齢者福祉分野の理解と支援②：高齢者介入技法に係わる心理職の役割					
11	被害者支援分野の理論と支援①：DV被害者支援における心理職の役割					
12	被害者支援分野の理論と支援②：犯罪被害者支援における心理職の役割					
13	被害者支援分野の理論と支援③：災害被害者支援における心理職の役割					
14	地域福祉分野の理論と展開：子どもの貧困、ひきこもりへの対応（コミュニティケア）における心理職の役割					
15	福祉分野における多職種連携のあり方について					
期末						
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生との共有をはかり、理解を深めることとする。					
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50％）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50％）。それらを基に総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	講義の展開に合わせ適宜、参考文献を紹介する。できるかぎり事前に読み授業に臨むこと。また、講義で確認できたことが次の講義にどのように発展するのか十分復習すること。					
履修上の注意	連続性があるので全講義に出席のこと。					
テキスト	各回のテーマに合わせ以下の参考文献を中心に適宜指示する。					
参考文献	佐藤泰正・桐原宏行・中山哲志（著）「福祉心理学総説」、田研出版、2011年 井上智義（著）「福祉の心理学―人間としての幸せの実現」、サイセンス社、2004年 古賀精治・田中新正（著）「障害児・障害者心理学特論（放送大学大学院教材）」、放送大学教育振興会、2013年 小西聖子（著）「犯罪被害者のメンタルヘルス」、誠信書房、2008年 ベッセル・ヴァン・デア・コーク（著）「身体はトラウマを記録する―脳・心・体のつながりと回復のための手法」、紀伊國屋書店、2016年					

科 目 名	司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	松嶋 祐子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	テーマは司法・犯罪分野にわる公認心理師の実践である。未成年の矯正・社会適応に向けて、また、保護観察下の人や成人受刑者の社会適応・再犯防止に向けた臨床心理学的理論の獲得と、家庭裁判所、少年鑑別所、刑務所、拘置所、少年院、保護観察所、児童自立支援施設、警察関係相談機関等さまざまな専門的相談機関における実践的支援活動のプロセスを理解する。				
授業のねらい・到達目標	・司法・犯罪分野における臨床心理学的課題について理解し説明が出来る ・司法・犯罪分野における心理支援専門職の具体的な実践内容について理解し説明出来る。 ・司法・犯罪分野における様々な機関で実践される心理支援のプロセスについて理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	非行と矯正における心理的背景				
3	非行と矯正における心理支援の内容				
4	非行と矯正における心理支援の連携・協働				
5	社会適応と再犯防止に関する心理的背景				
6	社会適応と再犯防止における心理支援の役割				
7	社会適応と再犯防止における心理支援の内容				
8	社会適応と再犯防止における心理支援の連携・協働				
9	少年鑑別所や少年院における心理支援専門職の実践				
10	刑務所における心理支援の実践				
11	薬物等依存や嗜癖に対する心理支援の実践				
12	自助グループや自立支援施設における心理支援の実践				
13	犯罪被害者支援における心理支援の実践				
14	司法・犯罪分野における心理支援の課題				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を利用しておこなう。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	産業・労働分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	テーマは産業・労働分野にわたる公認心理師の実践である。国や地方公共団体、企業内でのメンタルヘルス向上のため行われている臨床心理学的支援、コンサルテーション等に関わる理論の獲得と、企業内相談室、企業内健康管理センター、安全保健センター、ハローワーク、障害者職業センター等において行われている職業相談活動、具体的には職業への適性を巡る問題、発達障害を抱える人への臨床心理学的支援活動の実際とプロセスを理解する。				
授業のねらい・到達目標	・現代の産業・労働分野における臨床心理学的課題について理解し説明が出来る ・産業・労働分野における心理支援専門職の具体的な実践内容について理解し説明出来る。 ・就職や転職、企業内キャリア形成に関わる心理支援について理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	産業・労働分野における臨床心理学的問題の変遷				
3	産業・労働分野における現代的な臨床心理学的課題				
4	企業内健康管理部門における心理支援専門職の機能と役割				
5	企業内健康管理部門における心理支援専門職の実践活動の実際				
6	外部EAP機関における心理支援専門職の機能と役割				
7	外部EAP機関における心理支援専門職の実践活動の実際				
8	就職・転職支援機関における心理支援専門職の機能と役割				
9	就職・転職支援機関における心理支援専門職の実践活動の実際				
10	障がい者就労支援における心理支援専門職の機能と役割				
11	障がい者就労支援における心理支援専門職の実践活動の実際				
12	ひきこもり・ホームレス支援における心理支援専門職の機能と役割				
13	ひきこもり・ホームレス支援における心理支援専門職の実践活動の実際				
14	産業・労働分野における心理支援専門職の課題				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する連絡	でんでんばんを通しておこなう。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習指導Ⅰ		副題			
担 当 者	渡邊由己・伊東秀幸・伊東正裕・宮森孝史					
開 講 期	後期	単位数	1 単位	配当年次	1 年	
授業の概要	「心理実践実習Ⅰ」における事前・事後指導と、実習中の実習施設外指導をおこなう。必要に応じて実習現場指導者と連携を取り実習学生、実習先ともに安全で無理のない実習となるよう指導する、また将来心理専門職として活動するうえで、実習体験が経験知として活かせるよう、実習の省察をおこなう。					
授業のねらい・到達目標	・事前指導において、実習先の特徴、実習計画、実習態度（心構えを含む）を整理し、主体的に実習に向けて準備することが出来る ・実習中指導において、学生自らの実習の取り組みを主体的振り返り、心理実践実習における到達目標との距離を認識し、努力すべきことへの対処を見出し実践することが出来る ・事後指導において実習を総括し、心理実践実習の到達目標への到達状況を把握し実習の成果を報告することが出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション					
2	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりを確認する。					
3	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりについて各自発表と討論をおこなう					
4	事前指導：実習生としての基本的態度					
5	事前指導：実習記録の取り方、各種報告書の書き方					
6	事前指導：実習直前の訪問報告					
7	実習中指導：実習開始数日での初期指導					
8	実習中指導：帰校日指導 1 集団指導					
9	実習中指導：帰校日指導 2 個別指導					
10	実習中指導：実習終了期の指導					
11	実習報告書の作成					
12	実習報告会の準備					
13	実習報告会実施（13回目と14回目の2回分を使用）					
14	実習報告会実施					
15	この期の実習のまとめ					
期末						
授業に関する連絡	でんでんぱんの通知機能を用いておこなう					
評価方法及び評価基準	実習前、実習中、実習後それぞれの指導、課題への取り組みと報告会から総合的に評価する。					
事前・事後学習の内容	実習前は実習に備えた準備を、実習中は効果的な指導を受けるための疑問点等の整理を、実習後は体験の整理と学びの内容を分かりやすくプレゼンテーションする準備と工夫をおこなうこと					
履修上の注意	実習と密接な関係をもつ授業である。実習が質の高い学びとなるよう、効果的に取り組んで欲しい					
テキスト						
参考文献						

科 目 名	心理実践実習Ⅰ		副題		
担 当 者	宮森孝史・伊東秀幸・伊東正裕・渡邊由己・筒井順子・本多潤子・温泉美雪・五島史子 櫻井優太・新井彩加				
開 講 期	後期	単位数	1単位	配当年次	1年次
授業の概要	本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅱ・Ⅲと調整する。				
授業のねらい ・到達目標	・心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・支援対象者へのチームアプローチが出来る ・多職種連携や地域連携が出来る ・公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
・設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・現場指導者による指導のほか、「心理実践実習指導1」による実習前、実習中、実習後の指導もおこなうので、こちらへの参加も必須である					
期末					
授業に関する 連 絡	でんでんばんによる通知機能を用いた連絡の他、実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。				
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。				
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。				
履修上の注意	他施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。				
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習指導Ⅱ		副題		
担 当 者	渡邊由己・伊東秀幸・伊東正裕・宮森孝史				
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	2 年
授業の概要	「心理実践実習Ⅱ」における事前・事後指導と、実習中の実習施設外指導をおこなう。必要に応じて実習現場指導者と連携を取り実習学生、実習先ともに安全で無理のない実習となるよう指導する、また将来心理専門職として活動するうえで、実習体験が経験知として活かせるよう、実習の省察をおこなう。				
授業のねらい ・到達目標	・事前指導において、実習先の特徴、実習計画、実習態度（心構えを含む）を整理し、主体的に実習に向けて準備することが出来る ・実習中指導において、学生自らの実習の取り組みを主体的振り返り、心理実践実習における到達目標との距離を認識し、努力すべきことへの対処を見出し実践することが出来る ・事後指導において実習を総括し、心理実践実習の到達目標への到達状況を把握し実習の成果を報告することが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション				
2	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりを確認する。				
3	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりについて各自発表と討論をおこなう				
4	事前指導：実習生としての基本的態度				
5	事前指導：実習記録の取り方、各種報告書の書き方				
6	事前指導：実習直前の訪問報告				
7	実習中指導：実習開始数日での初期指導				
8	実習中指導：帰校日指導 1 集団指導				
9	実習中指導：帰校日指導 2 個別指導				
10	実習中指導：実習終了期の指導				
11	実習報告書の作成				
12	実習報告会の準備				
13	実習報告会実施（13回目と14回目の2回分を使用）				
14	実習報告会実施				
15	この期の実習のまとめ				
期末					
授業に関する 連 絡	でんでんぱんの通知機能を用いておこなう				
評価方法 及び評価基準	実習前、実習中、実習後それぞれの指導、課題への取り組みと報告会から総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	実習前は実習に備えた準備を、実習中は効果的な指導を受けるための疑問点等の整理を、実習後は体験の整理と学びの内容を分かりやすくプレゼンテーションする準備と工夫をおこなうこと				
履修上の注意	実習と密接な関係をもつ授業である。実習が質の高い学びとなるよう、効果的に取り組んで欲しい				
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習Ⅱ		副題		
担 当 者	宮森孝史・伊東秀幸・伊東正裕・渡邊由己・筒井順子・本多潤子・温泉美雪・五島史子 櫻井優太・新井彩加				
開 講 期	前期	単位数	1単位	配当年次	2年次
授業の概要	本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅰ・Ⅲと調整する。				
授業のねらい ・到達目標	・心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・支援対象者へのチームアプローチが出来る ・多職種連携や地域連携が出来る ・公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
・設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。・現場指導者による指導のほか、「心理実践実習指導Ⅱ」による実習前、実習中、実習後の指導もおこなうので、こちらへの参加も必須である					
期末					
授業に関する 連 絡	でんでんばんによる通知機能を用いた連絡の他、実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。				
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。				
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。				
履修上の注意	他施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。				
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習指導Ⅲ		副題		
担 当 者	宮森孝史・伊東秀幸・伊東正裕・渡邊由己				
開 講 期	後期	単位数	1 単位	配当年次	2 年
授業の概要	「心理実践実習Ⅲ」における事前・事後指導と、実習中の実習施設外指導をおこなう。必要に応じて実習現場指導者と連携を取り実習学生、実習先ともに安全で無理のない実習となるよう指導する、また将来心理専門職として活動するうえで、実習体験が経験知として活かせるよう、実習の省察をおこなう。				
授業のねらい ・到達目標	・事前指導において、実習先の特徴、実習計画、実習態度（心構えを含む）を整理し、主体的に実習に向けて準備することが出来る ・実習中指導において、学生自らの実習の取り組みを主体的振り返り、心理実践実習における到達目標との距離を認識し、努力すべきことへの対処を見出し実践することが出来る ・事後指導において実習を総括し、心理実践実習の到達目標への到達状況を把握し実習の成果を報告することが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション				
2	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりを確認する。				
3	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりについて各自発表と討論をおこなう				
4	事前指導：実習生としての基本的態度				
5	事前指導：実習記録の取り方、各種報告書の書き方				
6	事前指導：実習直前の訪問報告				
7	実習中指導：実習開始数日での初期指導				
8	実習中指導：帰校日指導 1 集団指導				
9	実習中指導：帰校日指導 2 個別指導				
10	実習中指導：実習終了期の指導				
11	実習報告書の作成				
12	実習報告会の準備				
13	実習報告会実施（13回目と14回目の2回分を使用）				
14	実習報告会実施				
15	この期の実習のまとめ				
期末					
授業に関する 連 絡	でんでんぱんの通知機能を用いておこなう				
評価方法 及び評価基準	実習前、実習中、実習後それぞれの指導、課題への取り組みと報告会から総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	実習前は実習に備えた準備を、実習中は効果的な指導を受けるための疑問点等の整理を、実習後は体験の整理と学びの内容を分かりやすくプレゼンテーションする準備と工夫をおこなうこと				
履修上の注意	実習と密接な関係をもつ授業である。実習が質の高い学びとなるよう、効果的に取り組んで欲しい				
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習Ⅲ		副題			
担 当 者	宮森孝史・伊東秀幸・伊東正裕・渡邊由己・筒井順子・本多潤子・温泉美雪・五島史子 櫻井優太・新井彩加					
開 講 期	後期	単位数	1単位	配当年次	2年次	
授業の概要	本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅰ・Ⅱと調整する。					
授業のねらい ・到達目標	・心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・支援対象者へのチームアプローチが出来る ・多職種連携や地域連携が出来る ・公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る					
授業の方法・授業計画						
・設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・現場指導者による指導のほか、「心理実践実習指導Ⅲ」による実習前、実習中、実習後の指導もおこなうので、こちらへの参加も必須である						
期末						
授業に関する 連 絡	でんでんばんによる通知機能を用いた連絡の他、実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。					
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。					
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら充分な振り返りをおこなうこと。					
履修上の注意	他施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。					
テキスト						
参考文献						

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	宮森 孝史				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。 宮森が担当する研究指導 I では、神経心理学の視点を学ぶとともに修士論文のテーマを模索する作業を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に関する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。 宮森が担当する研究指導 I は、神経心理学的な視点を養う。さらに、修士論文のテーマを確定するために論文検索を行い、学生間で情報交換と議論によって深めていく。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	文献検索の方法				
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認				
4	基礎文献の輪読：リハビリテーションや神経心理学に関する総説論文（レビュー）を読む①				
5	基礎文献の輪読：リハビリテーションや神経心理学に関する総説論文（レビュー）を読む②				
6	基礎文献の輪読：リハビリテーションや神経心理学に関する総説論文（レビュー）を読む③				
7	基礎文献の輪読：リハビリテーションや神経心理学に関する総説論文（レビュー）を読む④				
8	基礎文献の輪読：リハビリテーションや神経心理学に関する総説論文（レビュー）を読む⑤				
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①				
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②				
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③				
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④				
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤				
14	研究発表				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後合わせて2時間の学修を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各自のテーマに沿った文献を適宜指示する。				
参考文献	南風原朝和・下山晴彦・市川伸一（編）「心理学研究入門ー調査・実験から実践まで」、東京大学出版会、2001年 福島哲夫（編）「臨床現場で役立つ質的研究法ー臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで」、新曜社、2016年 小川俊樹・望月聡（著）「臨床心理学研究法特論（放送大学大学院教材）」、放送大学教育振興会、2018年 高野陽太郎・岡隆（編）「心理学研究法（補訂版）」、有斐閣、2017年				

科 目 名	研究指導Ⅰ		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。 伊東秀幸の研究指導Ⅰでは、精神障害者の生活に焦点を当て、すべての人にとって共通する社会との関係性について考察していく。その過程の中で、自らの修士論文のテーマを確定していく。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に冠する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	文献検索の方法				
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認				
4	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む①				
5	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む②				
6	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む③				
7	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む④				
8	基礎文献の輪読：精神保健福祉と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む⑤				
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①				
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②				
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③				
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④				
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤				
14	研究発表				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。				
参考文献	授業の中で適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	渡邊 由己				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。 渡邊の研究指導 I では、コミュニティ心理学の視点を確立するとともに、修士論文のテーマを検討するために関連論文の検索を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に関する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	文献検索の方法				
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認				
4	基礎文献の輪読：コミュニティ心理学に関する総説論文（レビュー）を読む①				
5	基礎文献の輪読：コミュニティ心理学に関する総説論文（レビュー）を読む②				
6	基礎文献の輪読：コミュニティ心理学に関する総説論文（レビュー）を読む③				
7	基礎文献の輪読：コミュニティ心理学に関する総説論文（レビュー）を読む④				
8	基礎文献の輪読：コミュニティ心理学に関する総説論文（レビュー）を読む⑤				
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①				
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②				
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③				
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④				
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤				
14	研究発表				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。				
参考文献	授業の中で適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。 中川が担当する研究指導 I では、精神障害者リハビリテーションの考え方を取得するとともに、学生各自が修士論文のテーマを確定できるよう関連論文を検索し、発表する。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に関する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	文献検索の方法				
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認				
4	基礎文献の輪読：精神医学と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む①				
5	基礎文献の輪読：精神医学と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む②				
6	基礎文献の輪読：精神医学と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む③				
7	基礎文献の輪読：精神医学と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む④				
8	基礎文献の輪読：精神医学と心理支援に関する総説論文（レビュー）を読む⑤				
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①				
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②				
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③				
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④				
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤				
14	研究発表				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。				
参考文献	授業の中で適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導 I		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	学部課程で培ってきた心理学の専門知識と技術を活かして、修士論文に結実する研究を遂行するための実践的スキルと問題解決能力を養う。自らの研究テーマに関する論文を広く渉猟し、精読し、批判的に検討し論点を深めて行く訓練をする。 伊東正裕が担当する研究指導 I では、精神分析学の考え方から行動を理解分析するという視点を学ぶとともに、受講生自らの興味関心を基に修士論文のテーマを模索していく。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文のテーマを決定するために、担当者の専門領域に関する必要な文献を収集する。 2. 修士論文の作成に向けて基礎論文を講読し、理解する。 3. 講読した論文の要旨をまとめ、自己の研究テーマの決定に結びつけることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて				
2	文献検索の方法				
3	研究テーマの構想と研究手続きの確認				
4	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む①				
5	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む②				
6	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む③				
7	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む④				
8	基礎文献の輪読：力動的対人理解に関する総説論文（レビュー）を読む⑤				
9	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む①				
10	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む②				
11	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む③				
12	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む④				
13	基礎文献の輪読：総説論文の引用・参考文献を読む⑤				
14	研究発表				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後学修に毎回2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で講読した文献の内容とを結びつけて、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各字の研究テーマに沿って設定する。				
参考文献	授業の中で適宜紹介する。				

科目名	研究指導Ⅱ		副題		
担当者	宮森 孝史				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1年
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 宮森が担当する研究指導Ⅱは、修士論文のテーマに関する先行研究を行い、研究計画を確定する。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②				
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認				
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①				
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②				
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③				
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④				
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤				
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥				
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始				
10	パイロットスタディの実施①				
11	パイロットスタディの実施②				
12	パイロットスタディの実施③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト					
参考文献	南風原朝和・下山晴彦・市川伸一（編）「心理学研究入門ー調査・実験から実践まで」、東京大学出版会、2001年 福島哲夫（編）「臨床現場で役立つ質的研究法ー臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで」、新曜社、2016年 小川俊樹・望月聡（著）「臨床心理学研究法特論（放送大学大学院教材）」、放送大学教育振興会、2018 高野陽太郎、岡隆（編）「心理学研究法（補訂版）」、有斐閣、2017年				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東秀幸の研究指導Ⅱでは、研究指導Ⅰの内容を踏まえて修士論文の研究テーマを確立し、それに沿った先行研究を行い、研究計画を考える。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②				
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認				
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①				
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②				
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③				
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④				
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤				
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥				
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始				
10	パイロットスタディの実施①				
11	パイロットスタディの実施②				
12	パイロットスタディの実施③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	渡邊 由己				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 渡邊の研究指導Ⅲは、修士論文作成にむけた研究計画に基づいて、調査、実験を行いデータの収集と分析を行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②				
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認				
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①				
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②				
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③				
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④				
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤				
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥				
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始				
10	パイロットスタディの実施①				
11	パイロットスタディの実施②				
12	パイロットスタディの実施③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	研究指導Ⅰで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 中川が担当する研究指導Ⅱでは、学生各自が研究計画を確立し、それにそった調査を行っていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②				
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認				
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①				
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②				
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③				
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④				
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤				
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥				
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始				
10	パイロットスタディの実施①				
11	パイロットスタディの実施②				
12	パイロットスタディの実施③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。 事前・事後学修として2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅱ		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1年
授業の概要	研究指導Iで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東正裕が担当する研究指導Ⅱでは、修士論文のテーマに関連した論文を検索しテーマを深め、確定していく。				
授業のねらい・到達目標	1. 修士論文の作成に向けて、自らの研究テーマに沿った基礎文献を購読し、理解する。 2. 修士論文のテーマに沿った研究手続きを構想し、パイロットスタディに着手する。 3. パイロットスタディの実施により、より明確な修士論文のための研究手続きの構築ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー修士論文の作成に向けて②				
2	研究テーマの設定と研究手続きの確認				
3	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む①				
4	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む②				
5	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む③				
6	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む④				
7	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑤				
8	基礎文献の輪読：研究テーマに沿った論文を読む⑥				
9	研究手続きに沿ったパイロットスタディの開始				
10	パイロットスタディの実施①				
11	パイロットスタディの実施②				
12	パイロットスタディの実施③				
13	研究発表①				
14	研究発表②				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本講では、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）、及び研究発表（50%）を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に望むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。事前・事後学修として2時間を求める。				
履修上の注意	自分自身の研究テーマについての問題意識と授業で購読した文献の内容とを結びつけ、修士論文のテーマを形成すること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	宮森孝史				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2年
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 宮森が担当する研究指導Ⅲでは、研究計画に基づき、調査、実験を行ってデータを取集分析する。				
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて				
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導				
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦				
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧				
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨				
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩				
13	中間報告会に向けての指導①				
14	中間報告会に向けての指導②				
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）				
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	各自のテーマに沿った文献を適宜指示する。				
参考文献	南風原朝和・下山晴彦・市川伸一（編）「心理学研究入門ー調査・実験から実践まで」、東京大学出版会、2001年 福島哲夫（編）「臨床現場で役立つ質的研究法ー臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで」、新曜社、2016年 小川俊樹・望月聡（著）「臨床心理学研究法特論（放送大学大学院教材）」、放送大学教育振興会、2018年 高野陽太郎、岡隆（編）「心理学研究法（補訂版）」、有斐閣、2017年				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2年
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東秀幸の研究指導Ⅲでは、修士論文のテーマに沿った文献研究、フィールドワークを行い、データの収集と分析を行う。				
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて				
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導				
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦				
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧				
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨				
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩				
13	中間報告会に向けての指導①				
14	中間報告会に向けての指導②				
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）				
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	渡邊 由己				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2年
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 渡邊の研究指導Ⅲでは、調査、実践のデータ分析を基に修理論文を執筆するために、指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて				
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導				
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦				
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧				
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨				
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩				
13	中間報告会に向けての指導①				
14	中間報告会に向けての指導②				
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）				
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば語別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2年
授業の概要	研究指導Ⅱで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 中川が担当する研究指導Ⅲでは、修士論文の執筆に対して個別指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて				
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導				
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦				
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧				
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨				
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩				
13	中間報告会に向けての指導①				
14	中間報告会に向けての指導②				
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）				
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	各自のテーマに沿って、必要であれば個別に設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅲ		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2年
授業の概要	研究指導IIで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくより洗練された質の高い論文完成に導くように指導する。 伊東正裕が担当する研究指導Ⅲでは、研究計画にそって修士論文の作成の基盤となる先行研究を行い、調査によってデータを収集する。				
授業のねらい・到達目標	修士論文のテーマに沿った論文購読を行い、研究手続きに従った研究を実行し、それらを中間発表に結実させる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の執筆に向けて				
2	パイロットスタディから発展させた本論文作成への指導				
3	各自のテーマに沿った論文作成指導①				
4	各自のテーマに沿った論文作成指導②				
5	各自のテーマに沿った論文作成指導③				
6	各自のテーマに沿った論文作成指導④				
7	各自のテーマに沿った論文作成指導⑤				
8	各自のテーマに沿った論文作成指導⑥				
9	各自のテーマに沿った論文作成指導⑦				
10	各自のテーマに沿った論文作成指導⑧				
11	各自のテーマに沿った論文作成指導⑨				
12	各自のテーマに沿った論文作成指導⑩				
13	中間報告会に向けての指導①				
14	中間報告会に向けての指導②				
15	本論文完成に向けての課題の確認と総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講生と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	中間報告会に向けての準備状況（50%）、中間報告会での発表内容（50%）				
事前・事後学習の内容	事前に各自の研究テーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	各自のテーマに沿った文献を適宜指示する。				
参考文献	南風原朝和・下山晴彦・市川伸一（編）「心理学研究入門ー調査・実験から実践まで」、東京大学出版会、2001年 福島哲夫（編）「臨床現場で役立つ質的研究法ー臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで」、新曜社、2016年 小川俊樹・望月聡（著）「臨床心理学研究法特論（放送大学大学院教材）」、放送大学教育振興会、2018年 高野陽太郎、岡隆（編）「心理学研究法（補訂版）」、有斐閣、2017年				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	宮森 孝史				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 宮森が担当する研究指導Ⅳでは、修士論文完成に向けて個別指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文の完成に向けての個別指導⑩				
12	論文の完成に向けての個別指導⑪				
13	研究発表へ向けての指導①				
14	研究発表へ向けての指導②				
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	各自の研究テーマに沿った文献を適宜指示する。				
参考文献	南風原朝和・下山晴彦・市川伸一（編）「心理学研究法入門ー調査・実験から実践まで」、東京大学出版会、2001年 福島哲夫（編）「臨床現場で役立つ質的研究法ー臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで」、新曜社、2016年 小川俊樹・望月聡（編）「臨床心理学研究法特論（放送大学大学院教材）」、放送大学教育振興会、2018年 高野陽太郎、岡隆（編）「心理学研究法（補訂版）」、有斐閣、2017年				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 伊東秀幸の研究指導Ⅳでは、修士論文完成を目指して、個別指導を中心に研究指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文の完成に向けての個別指導⑩				
12	論文の完成に向けての個別指導⑪				
13	研究発表へ向けての指導①				
14	研究発表へ向けての指導②				
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	必要に応じて設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	渡邊 由己				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 渡邊の研究指導Ⅳは、修士論文完成にむけて個人指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文の完成に向けての個別指導⑩				
12	論文の完成に向けての個別指導⑪				
13	研究発表へ向けての指導①				
14	研究発表へ向けての指導②				
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	必要に応じて設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 中川が担当する研究指導Ⅳでは、データの分析と考察を深めた修士論文になるよう個別指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション—論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文の完成に向けての個別指導⑩				
12	論文の完成に向けての個別指導⑪				
13	研究発表へ向けての指導①				
14	研究発表へ向けての指導②				
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	必要に応じて設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	研究指導Ⅳ		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	2 年
授業の概要	研究指導Ⅲで獲得した能力を基に、自らの研究テーマを結実すべくよい洗練された質の高い論文完成に導くよう指導する。 伊東正裕が担当する研究指導Ⅳでは、これまでの研究指導を踏まえて修士論文の執筆するために指導を行う。				
授業のねらい・到達目標	教員の指導を受けながら、論文の執筆作業に集中し、完成に向かう。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー論文の完成に向けて				
2	論文の完成に向けての個別指導①				
3	論文の完成に向けての個別指導②				
4	論文の完成に向けての個別指導③				
5	論文の完成に向けての個別指導④				
6	論文の完成に向けての個別指導⑤				
7	論文の完成に向けての個別指導⑥				
8	論文の完成に向けての個別指導⑦				
9	論文の完成に向けての個別指導⑧				
10	論文の完成に向けての個別指導⑨				
11	論文の完成に向けての個別指導⑩				
12	論文の完成に向けての個別指導⑪				
13	研究発表へ向けての指導①				
14	研究発表へ向けての指導②				
15	研究指導Ⅰ～Ⅳの総括				
期末					
授業に関する連絡	本講は、受講者と教員が相談して授業時間を決定する。				
評価方法及び評価基準	論文執筆の遂行状況（50%）、研究発表会に向けての準備状況（50%）。				
事前・事後学習の内容	事前に各自のテーマに関連する文献検索を行い、授業後には教員や他の学生から得たコメントを基に論文を洗練させていく。				
履修上の注意	授業のみならず、教員との個別指導を通して、計画的に論文を書き進めること。				
テキスト	必要に応じて設定する。				
参考文献	適宜紹介する。				